

薬師前遺跡

畜産基盤再編総合整備事業（美作地区鏡野団地造成）に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告

1999

岡山県苦田郡鏡野町教育委員会

やく　し　まえ
薬師前遺跡

畜産基盤再編総合整備事業（美作地区鏡野団地造成）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

1999

岡山県苦田郡鏡野町教育委員会



藥師前遺跡第14号土壤出土土器



藥師前遺跡第15号土壤出土土器



藥師前遺跡第15号土壤出土土器

序

恵まれた自然と香々美川の清流に形成された沖積平野により、古くから繁栄した水と花と心の町鏡野は県北有数の遺跡地帯であり、遺跡の保存と調和のとれた開発は町政の大きな課題であります。特に薬師前遺跡の所在する真加部地区は美作において最大級の横穴式石室墳である井上大塚（火の釜）古墳を擁することで有名ですが、最近前方後円墳であることが明らかになった真加部9号墳（八幡様御旅所）や柄ヶ鼻の土器散布地も重要な埋蔵文化財包蔵地です。

とりわけ注目されるのは、柄ヶ鼻に残る「コウゲワキ」・「ミヤコウケ」という地名で、863年（貞觀5）の苦田郡東西分割に伴い苦西郡の郡衙が設置された所と推定されています。この他に中世の武士の館跡である石須構、江戸時代の高瀬舟の船着き場である鳴津や渡し場の跡があり、真加部地区はあらゆる時代の埋蔵文化財を包蔵する貴重な遺跡地帯であります。

薬師前遺跡はこれらの貴重な遺跡を護る目的で平成8年9月に試掘調査され、新たに発見された遺跡です。平成9年4月から6月にかけて、畜産基盤再編総合整備事業（美作地区鏡野団地造成）に伴う埋蔵文化財の調査として鏡野町教育委員会により発掘調査がなされ、弥生時代後期末の土器としては美作において第一級の資料を得ることができました。これは発掘調査から報告書刊行までご理解とご尽力を賜りました社団法人岡山県農地開発公社とホクラク農業協同組合、並びに現地調査の実施に際してご協力頂きました地元の皆様のお陰であります。このことについて厚く御礼申し上げます。

この度刊行のはこびとなりましたこの報告書が美作地方の原始・古代の歴史の解明にいさぎかでも役立てば望外の喜びであります。

平成11年3月30日

岡山県苦田郡鏡野町教育委員会
教育長職務代理者 佐々木茂宣

例　言

1. 本書は畜産基盤再編総合整備事業（美作地区鏡野団地造成）に伴う薬師前遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査の経費と整理・報告の経費はすべて社団法人岡山県農地開発公社の負担によるものである。
3. 発掘調査と本書の執筆、編集、写真撮影は鏡野町教育委員会社会教育課立石盛詞が担当した。
4. 本書に用いたレベル高は海拔高である。また、方位は平面直角座標系第V系の北である。
5. 本書で用いた遺物実測図の縮尺は土器1/4を原則とした。これと異なるものについてはその都度表示した。
6. 本書で用いた土器実測図のうち中心線が一点破線になっているものは反転実測である。
7. 本書で用いた遺構図の縮尺は、住居跡1/80、建物1/80、溝1/80、出土状況図1/20、土壌1/40を原則とした。これと異なるものについてはその都度表示した。
8. 薬師前遺跡出土土器の器種は、壺形土器・甕形土器・鼓器台形土器・高杯形土器・杯形土器であるが、本書では器種について壺・甕・鼓形器台・高杯・杯とだけ記す。
9. 本書で用いた第1図の「薬師前遺跡周辺の遺跡分布図」は建設省国土地理院発行二万五千分の一（津山西部平成4年3月1日発行1刷）を使用した。
10. 出土遺物観察表のなかの微砂粒とは径1^{ミリ}未満、細砂粒とは径1^{ミリ}以上～2^{ミリ}未満、粗砂粒とは径2^{ミリ}以上をいう。
11. 本書において略号の使用はできるだけ避けたが、編集の都合で使用する略号は次のとおりである。
SB：住居跡 SH：建物 SD：溝 SK：土壌 P：柱穴
12. 本書の作成に必要な土器復原・図面整理・トレースに当たっては杉本栄子・杉本ひろみ・成宗和子・山本真諸氏の協力を得た。
13. 出土遺物・図面・写真是鏡野町歴史資料館（鏡野町竹田660番地）に保管している。

目 次

序

例 言

| | |
|-------------------------|----|
| 第Ⅰ章 調査に至る経過と調査の組織 | 1 |
| 1 調査に至る経過 | 1 |
| 2 調査の組織 | 1 |
| 第Ⅱ章 遺跡の立地と環境 | 2 |
| 1 遺跡の立地 | 2 |
| 2 歴史的環境 | 4 |
| 第Ⅲ章 薬師前遺跡の遺構と遺物 | 8 |
| 1 調査区の設定とグリッドの呼称 | 8 |
| 2 A区の遺構と遺物 | 10 |
| a 住居跡 | 10 |
| b 掘立柱建物跡 | 11 |
| c 土壙 | 12 |
| d 柱穴 | 25 |
| e 溝 | 26 |
| 3 B区の概要と調査 | 27 |
| 第Ⅳ章 薬師前遺跡出土土器について | 28 |

挿図目次

| | | | |
|-------------------|----|----------------------------------|----|
| 第1図 薬師前遺跡周辺の遺跡分布図 | 3 | 第12図 第12号～第15号土壤 | 16 |
| 第2図 薬師前遺跡調査区位置図 | 8 | 第13図 第16号～第21号土壤 | 17 |
| 第3図 A区全測図 | 9 | 第14図 第22号～第27号土壤 | 18 |
| 第4図 B区全測図 | 10 | 第15図 第1号・第2号土壤出土遺物 | 19 |
| 第5図 第1号住居跡 | 10 | 第16図 第5号・第8号・第14号・ 第15号土壤出土遺物 | 20 |
| 第6図 第1号住居跡出土遺物 | 10 | 第17図 第15号土壤出土遺物 | 21 |
| 第7図 第1号・第2号掘立柱建物跡 | 11 | 第18図 第1号溝出土遺物 | 26 |
| 第8図 第3号掘立柱建物跡 | 12 | 第19図 第1号・第2号溝 | 26 |
| 第9図 第1号・第2号土壤 | 13 | 第20図 B区第1号トレンチ土層断面図 | 27 |
| 第10図 第3号～第8号土壤 | 14 | | |
| 第11図 第9号～第11号土壤 | 15 | | |

表目次

| | | | |
|-----------------|----|-------------|----|
| 第1表 鏡野町教育委員会組織表 | 1 | 第3表 柱穴計測一覧表 | 25 |
| 第2表 土壌計測一覧表 | 13 | | |

図版目次

| | | | |
|-----------------|--|-----------------|--|
| 図版1 A区全景 | | 図版4 第2号土壤出土坏 | |
| 第1号住居跡 | | 第2号土壤出土坏 | |
| 第1号・第2号掘立柱建物跡 | | 第2号土壤出土蓋 | |
| 第3号掘立柱建物跡 | | 図版5 第2号土壤出土蓋 | |
| 第1号土壤 | | 第2号土壤出土器台 | |
| 図版2 第2号土壤土器出土状態 | | 第14号土壤出土壺 | |
| 第5号土壤 | | 第14号土壤出土壺 | |
| 第14号土壤土器出土状態 | | 第14号土壤出土壺底部 | |
| 第15号土壤 | | 第14号土壤出土壺 | |
| 第15号土壤土器出土状態 | | 図版6 第14号土壤出土壺 | |
| 第15号土壤土器出土状態 | | 第14号土壤出土器台 | |
| 第1号溝 | | 第14号土壤出土器台 | |
| B区第1号トレンチ | | 第15号土壤出土壺 | |
| 図版3 第1号土壤出土壺 | | 第15号土壤出土壺 | |
| 第1号土壤出土器台 | | 第15号土壤出土壺 | |
| 第1号土壤出土高坏 | | 図版7 第15号土壤出土壺底部 | |
| 第2号土壤出土壺 | | 第15号土壤出土壺底部 | |
| 第2号土壤出土壺 | | 第15号土壤出土高坏 | |
| 第2号土壤出土壺 | | 第15号土壤出土器台 | |
| 図版4 第2号土壤出土壺 | | 第15号土壤出土坏 | |
| 第2号土壤出土壺 | | 第15号土壤出土坏 | |
| 第2号土壤出土高坏 | | | |

第Ⅰ章 調査に至る経過と調査の組織

1 調査に至る経過

平成8年6月、社団法人岡山県農地開発公社より鏡野町教育委員会に対して、鏡野町真加部字薬師前1383番地ほかに計画している美作地区鏡野団地造成予定地2.4haの範囲内における埋蔵文化財の有無に関する照会があった。鏡野町教育委員会は、これについて造成予定地に周知の遺跡はないが、周辺に石須構・鴨津・対岸の郷地区への渡し場跡等の中・近世の遺跡があるため試掘調査実施の必要性を返答した。このため当教育委員会と農地開発公社、ホクラク農業協同組合の三者による協議が行われ、埋蔵文化財の試掘調査を実施することが決まった。

試掘調査は建物の建設される部分を中心に平成8年9月2日から3日の二日間行われた。調査の結果、当初の予想に反して多量の土器片と袋状土壙と言われる貯蔵穴が発見され、造成予定地の一部が遺跡であることが明らかになった。このため三者は薬師前遺跡の取り扱いについて再び協議して、運転手控え所の建設場所を変更し、クーラー・ステーションと牛乳検査所の建築部分について発掘調査を行うことを決めた。農地開発公社は平成9年1月8日付で文化財保護法第57条5第1項、第57条2第1項の規定に基づき、遺跡発見の通知（岡農公第768号）と埋蔵文化財発掘の届出（岡農公第769号）を行い、鏡野町は平成9年4月7日付で農地開発公社と発掘調査の委託契約を締結した。

発掘調査は平成9年4月16日から平成9年7月7日にかけて行われ、文化財保護法第98条の2第1項に基づき、埋蔵文化財発掘調査の報告が平成9年6月4日付（鏡野教発第787号）で行われた。発掘調査は平成9年7月7日に終了した。

2 調査の組織

第1表 鏡野町教育委員会組織表

| | 平成8年度試掘調査 | 平成9年度発掘調査 | 平成10年度整理・報告 |
|----------|-----------|-----------|--------------|
| 職名 | 氏名 | 氏名 | 氏名 |
| 教育長 | 池上興一 | 池上興一 | 池上興一(4月~12月) |
| 教育長職務代理者 | | | 佐々木茂宣 |
| 次長 | | 佐々木茂宣 | 同上 |
| 社会教育課長 | 佐々木茂宣 | 次長兼務 | 次長兼務 |
| 社会教育課長補佐 | 本山繁基 | 本山繁基 | 本山繁基 |
| 発掘整理担当主任 | 立石盛詞 | 立石盛詞 | 立石盛詞 |
| 主任 | 金平憲明 | 石原靖之 | 石原靖之 |
| 社会教育指導員 | 水島義浩 | 水島義浩 | 定久正義 |
| 教育相談員 | 和仁英毅 | 和仁英毅 | |
| | 池田祐子 | 池田祐子 | 池田祐子 |
| | 豊田寿恵 | 豊田寿恵 | 豊田寿恵 |

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

薬師前遺跡は岡山県吉田郡鏡野町真加部字薬師前1383番地ほかに所在する。岡山県の外郭団体である社団法人岡山県農地開発公社を事業主とする畜産基盤再編総合整備事業に係る美作地区鏡野団地造成事業の予定地となつたために、鏡野町教育委員会により平成9年4月16日から平成9年7月7日にかけて発掘調査が行われた。

1 遺跡の立地

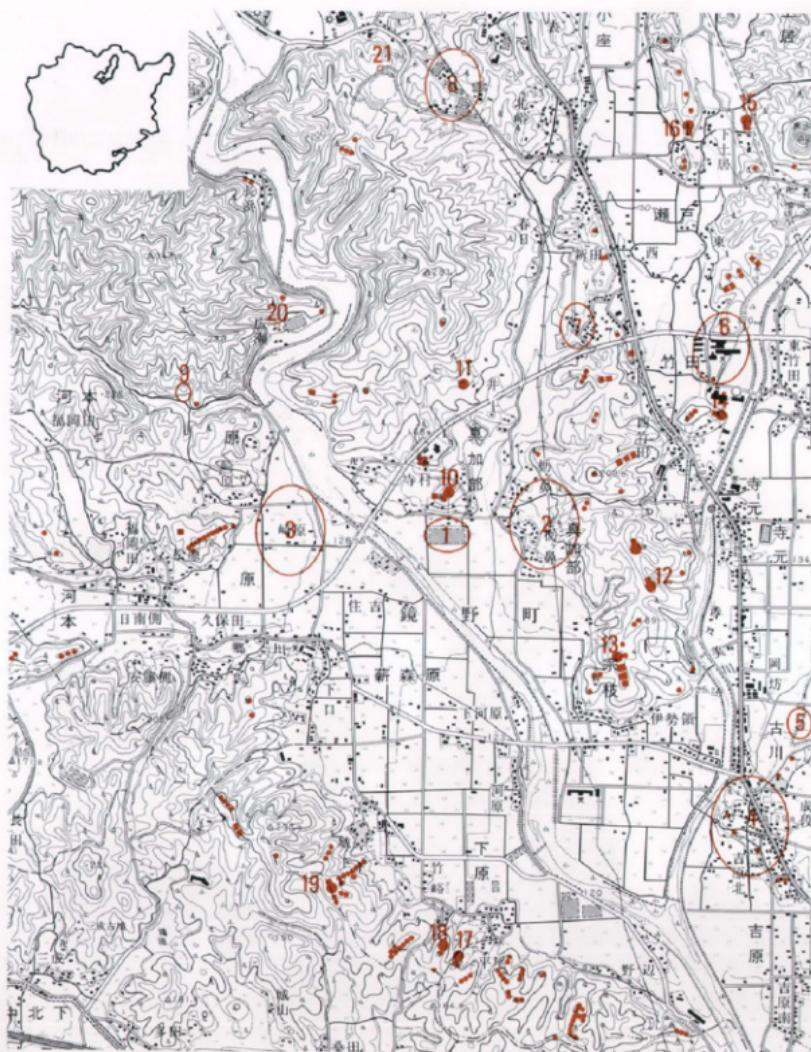
薬師前遺跡は仙形山の麓から南に延びる標高150m程の丘陵が吉井川に侵食されて形成された崖の直下に位置する。崖部は宅地化されこれに面する沖積地は圃場整備のために一面水田化されているが、かつては吉井川が柄ヶ鼻や宗枝地区に流入して明仙田川と合流し、自然堤防や後背湿地が点在しているものと思われる。

真加部地区は美作屈指の横穴式石室墳である井上大塚（火の釜）古墳の所在地として知られているが、領家・柄ヶ鼻の土器散布地も有名である。特に柄ヶ鼻付近には「高下脇」・「宮高下」という地名が残っており、863年（貞觀5）の吉田郡の東西分割に伴い苦西郡の郡衙が設置された所ではないかと推測されている。現在の国道179号線は古川・寺元・小座・塙谷を通過して奥津に至るが、この国道が開通する以前は古川・宗枝・真加部・塙谷というルートが主要幹線道であった。真加部地区に遺跡が各時代を通じて存在し、また遺跡の密集度が高いのはこのような理由によるものである。同地区内に所在する遺跡のほとんどは、伊勢領山・黒山・仙形山の山中に築かれた古墳を除き、麓の緩斜面に位置する。これらはいずれも新生代第三紀層を基盤として形成された山塊・丘陵に営まれた遺跡である。

津山地区的第三紀層は、植物化石を産する植木層と塩分の薄い汽水域に棲む貝の化石を含む吉野層と泥岩と砂岩の互層からなる海成層の高倉層に大別され、これらはまとめて勝田層群と呼ばれている。なかでも鏡野地区的地質構造は地表から300m程が典型的な高倉層に覆われ、水の浸透性の悪い泥岩のために地滑り地帯となっている。1956年に県指定天然記念物となった「大野の整合」はこの高倉層の露呈した断崖である。この断崖の上層5m程が第四紀層で繩文時代早期の竹田遺跡が検出され、その下層の25m程が泥岩と砂岩が10%～50%の厚さで交互に堆積する典型的な高倉層を形成している。

この他に鏡野町の地形を特徴づけるものに第四紀に形成された河岸段丘が存在する。現在は圃場整備で分かり難くなっているが、香々美川左岸の河岸段丘は藤屋・新町・香下・公保田・沢田・沖・古川・布原の8地区の総長6kmにわたり形成され、この段丘の縁には法明寺（火の釜）古墳・沢田王子塙古墳・成段古墳群・吉原古墳群が築かれている。

薬師前遺跡を営んだ人々は、吉井川の氾濫により形成された湿地で水稻耕作を行い、この水田の脇に居住していたものと思われる。このような集落の立地は河川の氾濫により形成された自然堤防に営まれた弥生時代の集落に近似するものである。鏡野町の沖積平野部分には吉井川・香々美川・上森川・山人川・郷川といった大小の河川により形成された自然堤防が存在するはずで、これらの自然堤防上には集落遺跡の存在が予測される。



1: 薬師前遺跡 2: 梶ヶ鼻道路 3: 二反田B道路 4: 成段遺跡 5: 大開遺跡 6: 竹田遺跡 7: 神宿遺跡 8: 鶴喜遺跡 9: 三谷散布地 10: 真加部9号墳 11: 井上大塚古墳 12: 古川3号墳 13: 伊勢領大塚古墳 14: 竹田妙見山古墳 15: 土居天王山古墳 16: 土居妙見山古墳 17: 總音山古墳 18: 大山古墳 19: 左衛門山6号墳 20: 広瀬古窯跡 21: 大唐谷遺跡

第1図 薬師前遺跡周辺の遺跡分布図 (1/25,000)

2 歴史的環境

a 先土器時代

鏡野町においてはいまだ先土器時代の遺跡は発見されていない。沖積平野や河岸段丘部分では河川の営みにより先土器時代の文化層が流され遺跡発見の望みはないが、第四紀層の厚く堆積した丘陵地帯やクロボクといわれる火山灰が厚く堆積する越畠地区の山麓緩斜面では遺跡の存在が予測できる。

b 繩文時代

鏡野町最古の遺跡は今から一万年前のBC8000年頃の遺跡とされる竹田遺跡である。この遺跡からは粗大楕円押型文土器と呼ばれる縄文時代早期中葉の土器が発見されるとともに、住居跡と考えられる小柱穴群が検出されている。この他に同時期の遺跡としては、古川の宝性寺境内に所在する成段遺跡、旧鏡野農協倉庫裏の酒居敷遺跡（小田公民館東隣り）、布原の九番丁場遺跡がある。これらの遺跡から出土した縄文土器は邑久郡牛窓町黄島の黄島貝塚の出土土器を指標とする黄島式土器に併行するものである。この他の縄文時代の遺跡としては鏡野町で初めて縄文土器が表面採集された沢田の隱峪東谷遺跡と山城広儀屋敷遺跡が確認されているにすぎない。これらの遺跡はいずれも縄文時代後期と考えられ、公儀屋敷遺跡出土土器は縄文時代後期初頭の中津Ⅱ式土器に併行するもの、隱峪東谷遺跡出土土器は中津式ないしは福田KⅡ式土器に併行するものである。

c 弥生時代

鏡野町には明確に弥生時代前期の遺跡と断定される遺跡は発見されていない。ただし、前期の土器片は沢田遺跡で一片だけ出土している。美作でこの時期の土器が発見されているのは、津山市天神原遺跡、同高橋谷遺跡、同京免遺跡と沢田遺跡にすぎない。これらの遺跡から出土した甕は断面三角形の貼付け口縁帶と口縁部が小さく外折するタイプに分かれ、邑久郡邑久町尾張に所在する門田遺跡より出土した前期後半の門田式土器に併行するものと考えられる。

次に位置づけられるのが大開遺跡の土壤から出土した土器である。この土器は中期初頭とされる高田式土器に併行する土器である。中期中葉から後葉にかけては遺跡の数は増えそうである。中期中葉の菰池式土器に併行する土器を出土する遺跡としては竹田遺跡、後葉の前山Ⅱ式土器に併行する土器を出土するのが新町遺跡である。この他に小座の旧鶴喜（剣）中学校跡地の鶴喜遺跡も前山Ⅱ式併行の土器や石器が多量に出土しているとされているが実態は不明である。

後期の遺跡とされるものは急増する。隱峪東谷遺跡の縄文土器を発見した御船恭平氏の実家の所在する布原の四番丁場（御船）遺跡、古川の極楽遺跡がそれとされ、発掘調査を経たものとしては竹田遺跡、瀬戸戸遺跡、布原の九番丁場遺跡がある。

d 古墳時代

古墳時代の集落跡は大開遺跡が知られているにすぎない。この遺跡は弥生時代中期初頭から始まり、古墳時代初頭、古墳時代中期、奈良時代と断続的に営まれた複合遺跡である。当該期の遺構としては住居跡が発見されている。現状では鏡野町内の古墳時代の遺跡として把握されているもののはほとんどが古墳である。集落遺跡については今後の発掘調査による資料増加に期待したい。

集落遺跡と異なりある程度内容の分かっているのが古墳である。鏡野町の古墳時代の遺跡としては前方後円墳を挙げなければならない。現在最古に位置付けられる前方後円墳は墳長43mの觀音山古墳である。この古墳は1909年に村人により発掘されている。この時、竪穴式石槨の中から鉛載の三角縁

四神四獸鏡、平縁半円方形帶神獸画像鏡、三角緣四獸鏡が各1枚と短剣・定角式・柳葉式鉄鎌が発見された。鏡野町史編纂に伴う近年の測量調査では後方部がバチ形に開く最古式の前方後円墳であることが確認されている。この次に位置づけられるのが赤船古墳である。墳長45mの前方後円墳で後円部の埋葬施設は砾床削竹形木棺と考えられている。出土品は舶載の龍虎鏡1枚と短冊形鉄斧1点、手斧1点、刀子1点、勾玉1点、ガラス小玉若干と二重口縁壺、土師器各1点である。また、後円部では簡略化された堅穴式石槨が検出されている。これら二つの前方後円墳はいずれも四世紀前半ないしはそれ以前に遡るとされているものである。

これに続くのが竹田妙見山古墳と土居妙見山古墳、古川3号墳である。竹田妙見山古墳は墳長36mを測る前方後円墳であるが後世の乱掘のため墳形が著しく変形しており、墳丘を考慮した編年の位置づけが不明となっている。出土品は二箇所に円孔のある鏡片で長宜子孫内行花文鏡の外区に酷似するとの指摘がある。この他にガラス小玉22点と数量は不明だが鉄器が出土したらしい。これらはいずれも礫の上から出土したとされていることから、埋葬施設は砾床木棺と推測されている。

土居妙見山古墳は竹田妙見山古墳から北西に1.4°の要田川と山人川に挟まれた標高168mの丘陵上に位置する。墳長25mを測る小型の前方後円墳で葺石が確認されている。後円部は乱掘され東西二つの粘土槨があることが分かっている。このうち西槨からは仿製内行花文鏡2枚、鉄劍2点と土師器が発見された。古川3号墳は先述の竹田妙見山古墳と土居妙見山古墳に前後する時期に造営されたと推測される古墳である。この古墳は伊勢領山の標高186mの尾根上に位置する墳長30mの前方後円墳で葺石が確認されている。これ以降は香々美川水系においてしばらくの間、前方後円墳の造営は停止される。

再び前方後円墳が築造されるようになるのは五世紀後半になってからである。この候補に挙げられるのが真加部9号墳と沖茶臼山古墳である。真加部9号墳は「へいのやま古墳」とも言われ、真加部地区の氏神様である八幡神社の御旅所である。このために後円部が著しく削平され、これまで方墳と考えられてきた。しかし、墳丘の北西半分は比較的の遺存状態が良く墳長24mの前方後円墳であることが明らかになった。出土品がないため位置づけが難しいが、五世紀後半の前方後円墳と考えたい。そして、これに続くのが墳長31m、周溝を合わせた大きさが48mを測る帆立貝式の沖茶臼山古墳である。

六世紀になって築かれるのは墳長21mの左衛門山6号墳である。この古墳は鏡野町総合調査の考古学を担当した歴史第一班により発掘調査された。主体部より須恵器6点、土師器1点、鉄鎌、鏃が出土したとされている。埋葬施設は木棺直葬と思われる。その後しばらく間をおいて築かれたのが土居天王山古墳である。墳長27mで片袖式横穴式石室をもつ。1926年頃の乱掘と1957年の発掘調査で須恵器18点、土師器4点、鉄刀、鉄鎌が出土したと言われているが、遺物が散逸して詳しい古墳の時期は不明である。残されている写真等からTK43型式の須恵器の時期に該当する六世紀後葉と思われ、香々美川水系最後の前方後円墳であるとともに最初の横穴式石室墳でもある。

上記の前方後円墳のほか前方後円（方）墳と言われているものに、寺元1号墳、笠松（1号）古墳、通り谷1号墳、淵長5号墳、黒田7号墳、道上古墳、鍋船尻古墳がある。通り谷1号墳、淵長5号墳、黒田7号墳は方墳が二つ連なったものと思うが確認できていない。また道上古墳、鍋船尻古墳はすでに消滅している。道上古墳について『岡山県遺跡地図』第五分冊は村誌に前方後円墳との記載ありとするが『郷の村誌』にそのような記述はない。

前方後円墳のほかに鏡野町には通り谷古墳群、黒田古墳群、淵長古墳群に代表される多くの方墳群

がある。この方墳群については最近の発掘調査で内容が明らかになりつつある。沖395番地に所在する東花穴古墳群は方墳6基からなる古墳群でどれも四世紀の所産と考えられている。この古墳群の特徴は墳丘の大きさが 14.5×11.2 m・高さが1.4m、同じく大きさが 15.2×12.2 m・高さが2.0mの2基の二段築成の方墳と墳丘の大きさが 10×9.2 m・高さが1.5mを測る一段築成の古墳1基、ほとんど盛り土による墳丘をもたない大きさが 6.3×5.3 mと7.5m四方、これに5m四方の3基の墳丘墓（台状墓）の系統を引く方墳から構成されていることである。この古墳群は短期間に形成されたもので、吉井川上流域と香々美川流域の前期古墳の階層構成に前方後円墳、円墳、二段築成の方墳、一段築成の方墳、盛り土による墳丘をもたない方墳の五段階があったことが分かる。

円墳については、以前前方後円墳と考えられていた径28.4m・高さ5mの大山古墳や径38m・高さ6mの伊勢領大塚古墳、径23m・高さ2.5mを測る鶴鳥1号墳が鏡野町を代表する大型円墳である。この中でおおよその築造時期が推定できるのは宗枝古墳群に所属する伊勢領大塚古墳である。この古墳は1853年（嘉永6）に乱掘された際、鏡・刀・須恵器・人骨が出土し、1945年以前は棺内に朱が厚く堆積していたという。埋葬施設は簡略化された箱式石棺で現在一部が露呈している。光井清三郎の祝部焼土器が出土したとする資料紹介が正しければ、五世紀前葉の最古式の須恵器ないしは陶質土器を伴う古墳であり、宗枝古墳群の形成時期解明の手掛かりとなろう。この他に後期の首長墳と思われる円墳に高山大塚古墳、新町の法明寺（火の釜）古墳と真加部の井上大塚古墳がある。

また、大型円墳だけではなく初期群集墳と言われる初期須恵器を副葬する円墳の存在も明らかになっている。香々美1144-1番地に所在する経塚古墳は瓦の原料とする粘土採取のために墳丘の四分の三が失われている。わずかに残された墳丘から推測すると径18m・高さ2.2mの円墳であろう。この古墳の埋葬施設とおぼしき地点から須恵器直口壺、坏身各1と鉄刀数振りが発見されたのである。出土に際して角礫等の出土した話はないことから木棺直葬と思われる。出土した須恵器はTK23型式に併行するもので、現在宅地や畠となっている所に初期群集墳が形成されていたらしい。これよりやや新しいMT15型式ないしはTK10型式に併行する須恵器を出土した円墳には今井堺が半堀8号墳として資料紹介した古墳がある。この古墳の埋葬施設は箱式石棺とされている。左衛門山古墳群も同時期の所産であろう。旧郷村の下原から薪森原地区にかけては赤岩古墳群、野屋古墳群、下原古墳群、半峪古墳群、才の丸古墳群、竹峪古墳群、左衛門山古墳群、通り谷古墳群等の多くの古墳群が知られているが、観音山古墳、大山古墳といった首長墳を除くと、ほとんどの古墳が4世紀頃の方墳群か、埋葬施設に木棺直葬あるいは箱式石棺を用いる5世紀後葉以降の初期群集墳と考えられ、横穴式石室墳の存在をまったく見ない特徴的な在り方をしている。

横穴式石室墳で著名なものには、先に後期の首長墳とした高山大塚古墳、新町の法明寺古墳、井上大塚古墳のほかに沢田の加市古墳と王子塚古墳がある。加市古墳は4個体の陶棺を出土した古墳として知られ、王子塚古墳は『苦田郡誌』に沢田塚として出土遺物の写真が掲載されている。現存する資料は両古墳を合わせて数点の須恵器でTK209型式に併行するものであるが、『苦田郡誌』に掲載された写真にはTK217型式に併行するものもある。子持ち土器が出土した高山の石井谷古墳も陶棺が出土した古墳であるが、これも現存資料はTK209型式からTK217型式の須恵器に併行するものである。石井谷古墳は1936年に妙見山へ登る参道を造る工事で破壊された古墳であるが、この時に破壊された古墳は2基あり、陶棺と子持ち土器それに鏡野町歴史資料館に現存する資料が2基の古墳のうちのいずれの古墳に帰属するか明らかではない。このほかに古い型式の陶棺を出土した古墳として山城の長浜

2号墳がある。径18.0m・高さ1.6mの円墳で最低3次にわたる追葬が確認できる横穴式石室墳である。この古墳からは陶棺の他に鐵錐16点、鈎状金具2点、耳環1点、須恵器28点、土師器2点が発見されている。最古型式に属するとされる波状文と竹管刺突文を施した陶棺の時期はTK209型式に併行するものである。

鏡野町の横穴式石室墳で特徴的な分布を示すのは旧郷村に所属した高山地区である。前・中期の古墳はほとんど存在しないが、高山地区だけで石室ないしは陶棺出土の伝聞のある横穴式石室墳が、高山（三谷）2・3・4・8・9・10（大塚）・11・12・13（大塚下）・15・16（大塚南）・21・22・23号墳の合計14基ある。わずかながら現存する須恵器はTK209型式併行からTK217型式併行のもので、7世紀初頭から前半にかけて築造されたと推測される。これらは先に指摘した旧郷村下原から薪森原地区にわたり分布する初期群集墳と対照的に後期群集墳を形成していたらしい。

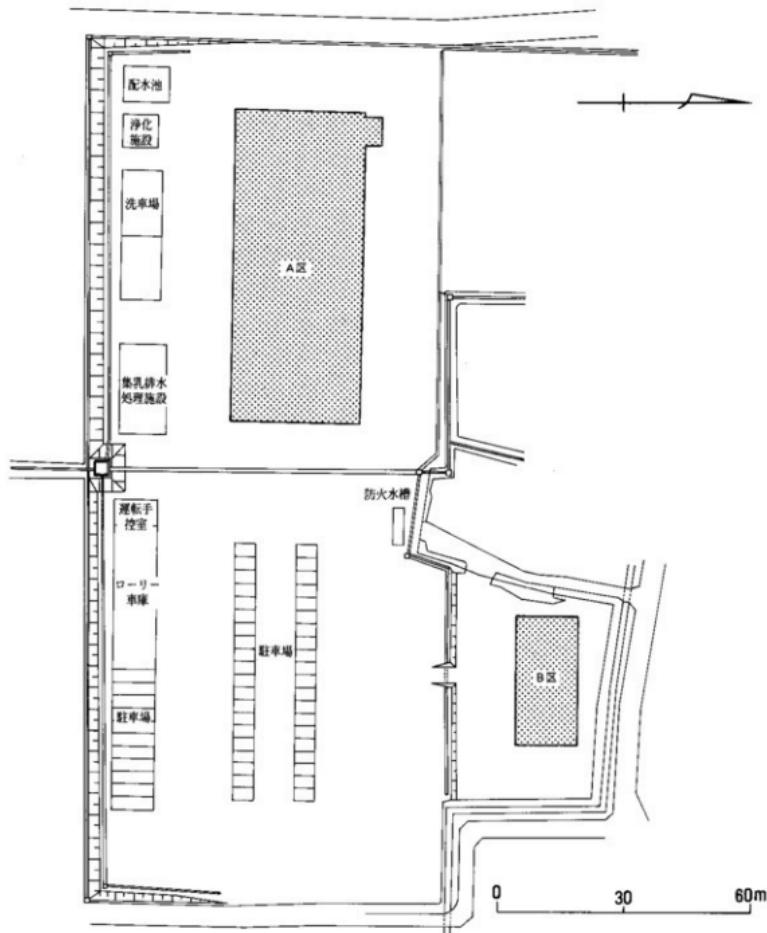
参考文献

- 光野千春ほか監修・野瀬重人編『地学のガイド』岡山県地学のガイドシリーズ11 コロナ社 1991
近藤義郎・今井克ほか『竹田墳墓群』竹田道路発掘調査報告第1集 鏡野町教育委員会 1984
安川豊史「美作」近藤義郎編『前方後円墳集成』中国・四国編 山川出版 1991
鏡野町学校教育研修所編『鏡野の歴史』史料集（1）鏡野町学校教育研修所 1959
寺坂五夫編『郷の村誌』郷村史編纂会 1960
光井清三郎「美作考古界（四）」「考古界」第貳號第九號 1902
花土文太郎・今田康編『若田郡誌』若田郡教育会 1927

第Ⅲ章 薬師前遺跡の遺構と遺物

1 調査区の設定とグリッドの呼称

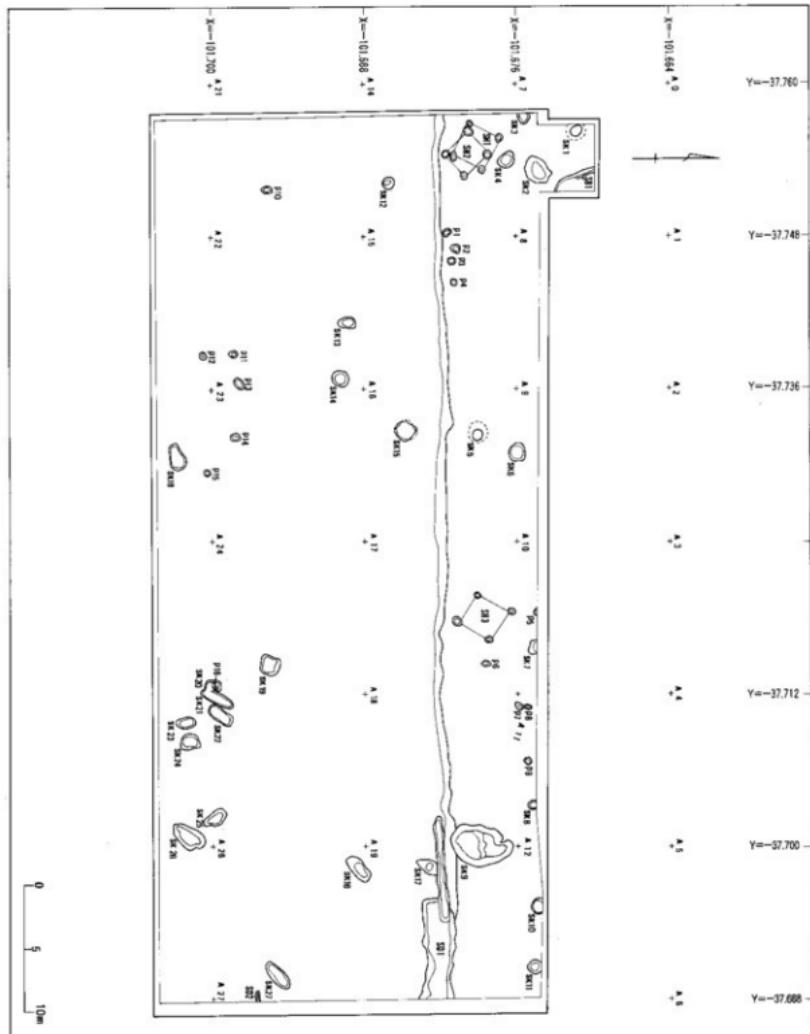
社団法人岡山県農地開発公社の畜産基盤再編総合整備事業による美作地区鏡野団地の造成予定面積は24,071.73平方㍍で、造成予定地はクーラー・ステーション建設予定地・検査所建設予定地・駐車場予定地の三箇所に別けられる。今回、発掘調査の対象にしたのはクーラー・ステーション建設予定



第2図 薬師前遺跡調査区位置図 (1/1,200)

地の2,272平方㍍と牛乳検査所建設予定地の390平方㍍である。これらの造成予定地は発掘調査の便宜上、クーラー・ステーション建設予定地をA区、検査所建設予定地をB区とした。造成予定地の南端に排水池・浄化施設・集乳排水処理施設・運転手控え室・ローリー車庫が造られるが、これらの部分については2㍍以上の埋立てが期待でき、圃場整備による削平も著しいことから調査は行わなかった。

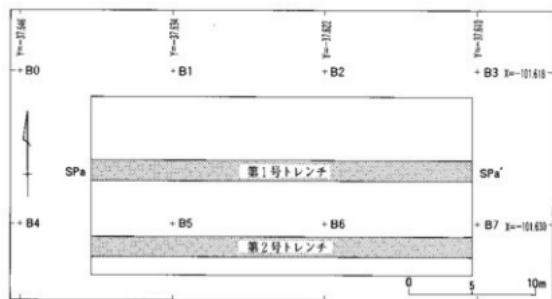
A区のグリッドは、調査区の北西隅を原点として12㍍間隔に東西軸に沿って6グリッド、南北軸に



第3図 A区全測図 (1/400)

沿って4グリッドの合計24グリッドを設定し、呼称は北東優位でA0～A27とした。B区のグリッドもこれに倣い、調査区北西隅を原点として東西に3グリッド、南北軸に2グリッドの6グリッド設定し、B0～B6とした。

A0の座標値はX=-101,664、Y=-37,760、B0の座標値はX=-101,618、Y=-37,646である。



第4図 B区全測図 (1/400)

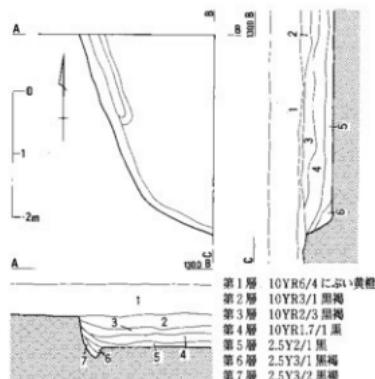
2 A区の遺構と遺物

A区で検出された遺構は、住居跡1・掘立柱建物跡3・土壙27・柱穴16・溝2である。これらのうち確実に弥生時代後期末の遺構と断定できるのは、第1号住居跡、第1号・第2号掘立柱建物跡、第1号・第2号・第5号・第14号・第15号土壙である。第1号溝については中世の遺構の可能性があり、土壙の多くは圃場整備の際に付けられた重機のバケット跡と葡萄栽培の際に掘られた穴である。ここでは主要なものだけを説明して、その他の土壙と柱穴については計測一覧表で示すこととする。

a 住居跡

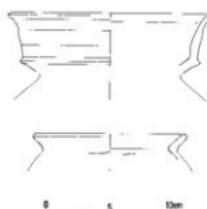
第1号住居跡（第5図）

A-1で検出された遺構である。住居跡の南西隅部分と考えた。規模は不明であるが検出部分の長さは3.1m、幅2.1mで、隅丸方形を呈する住居跡と思われる。確認された壁溝の長さは153cmで確認部分を全周しない。確認面から床面までの深さは42cm、床面からの壁溝の深さは16cmである。



第5図 第1号住居跡

遺物は覆土内から土器片が出土している。出土遺物に極端な後世の遺物の混入はない。しかし、いずれも小片で固化できるものは少ない。



第6図 第1号住居跡出土遺物

第1号 住居跡出土遺物観察表（第6図）

() は推定値：単位cm

| 番号 | 器種 | 大きさ | 形態手法の特徴 | 胎土・焼成・色調 | 備考 |
|----|----|------------------|---|--|---------------------|
| 1 | 壺 | 口径15.5 現存高4.7 | 口縁部は横ナデ。底部は観察できない。スヌの付着もなし。 | 細砂粒と金雲母を含む。焼成は良好で焼きが硬い。にぶい黄橙。 10YR6/4。口縁部10%現存。 | |
| 2 | 壺 | 口径11.6 現存高2.0 | く字状口縁を呈する。口縁部は横ナデ、胴部外表面は叩きの後を刷毛状工具で消したものと思われる。胴部内面は範削り。 | 砂粒は少なく精製されている。焼成は良好で焼きが硬い。橙5YR6/6。 口縁部10%現存。 | 煤付着。同一個体らしき胴部の破片あり。 |

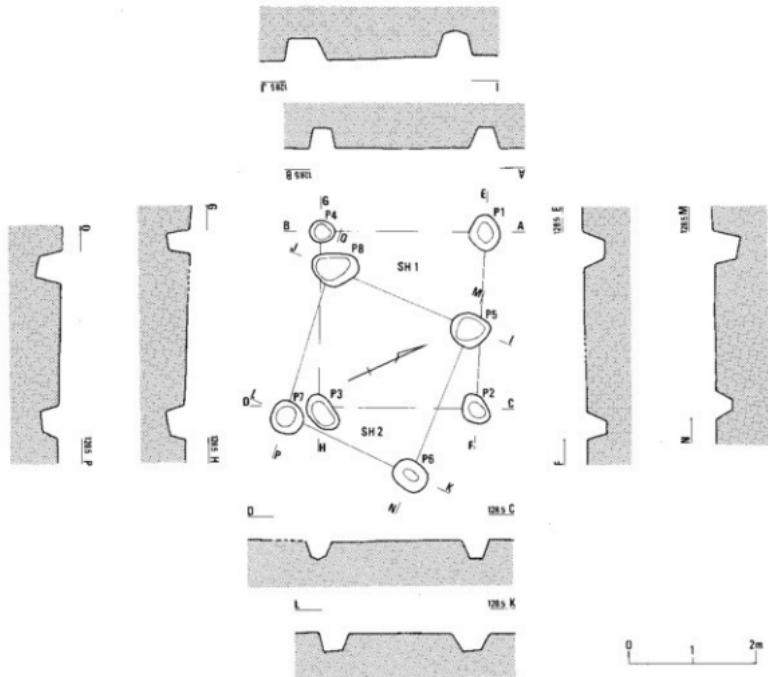
b 挖立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡（第7図）

A-8で検出された建物跡である。規模はP1とP2の桁の長さが2.80m、P3とP4の桁の長さが2.78mで、P1とP4の梁の長さが2.60m、P2とP3の梁の長さが2.50mである。

柱穴の大きさはP1が長径59mm・短径47mm・深さ36mm、P2が長径54mm・短径40mm・深さ32mm、P3が長径62mm・短径40mm・深さ26mm、P4が長径37mm・短径34mm・深さ32mmである。

細片のため図示しないがP4から10片の土器片が出土している。このうち5点は煤の付着した甕の胴部の破片で、叩きによる成形をした後に刷毛状工具で内外面の叩き目を消している。



第7図 第1号・第2号掘立柱建物跡

第2号掘立柱建物跡（第7図）

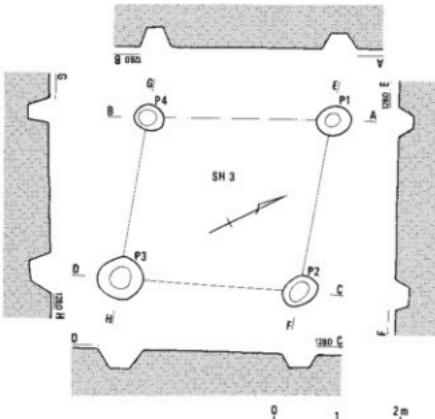
A-8で検出された建物跡である。第1号掘立柱建物跡と重複している。規模はP5とP6の桁の長さが2.48m、P7とP8の桁の長さが2.43mで、P5とP8の梁の長さが2.41m、P6とP7の梁の長さが2.20mである。

柱穴の大きさはP5が長径62mm・短径51mm・深さ42mm、P6が長径57mm・短径45mm・深さ27mm、P7が長径53mm・短径50mm・深さ29mm、P8が長径70mm・短径51mm・深さ39mmである。図示していないがP5から土器の細片が出土している。

第3号掘立柱建物跡（第8図）

A-11で検出された建物跡である。やや歪であり、建物跡ではない可能性が強いが、ここではとりあえず建物跡としておく。

規模はP1とP2の桁の長さが2.89m、P3とP4の桁の長さが2.92mで、P1とP4の梁の長さが2.76m、P2とP3の梁の長さが2.60mである。柱穴の大きさはP1が長径56mm・短径45mm・深さ21mm、P2が長径72mm・短径67mm・深さ32mm、P3が長径45mm・短径40mm・深さ39mm、P4が長径54mm・短径45mm・深さ20mmである。



第8図 第3号掘立柱建物跡

c 土壙

第1号土壙（第9図）

A-1で検出された袋状土壙と呼ばれる貯蔵穴である。開口部分の長径93mm・短径77mm・深さ97mmである。土壙の径は底に行くほど末広がりに大きくなり、底部の最大径は140mmを測る。

第2号土壙（第9図）

A-1で検出された遺構である。土壙の大きさは長径2.13m・短径1.66m・深さ93mmである。土壙の底部から一括出土した土器は弥生時代後期末の土器組成を明らかにする好資料である。

第5号土壙（第10図）

A-10で検出された袋状土壙である。開口部の径は81mm・深さは97mm・底部の径は140mmである。

第14号土壙（第12図）

A-16で検出された土壙である。長径130mm・短径119mm・深さ38mmのほぼ円形を呈する土壙である。出土土器は壺と鼓形器台だけで祭祀土壙の可能性がある。これらの土器は一括廃棄されたもので、どれも折り重なるようにして出土している。

第15号土壙（第12図）

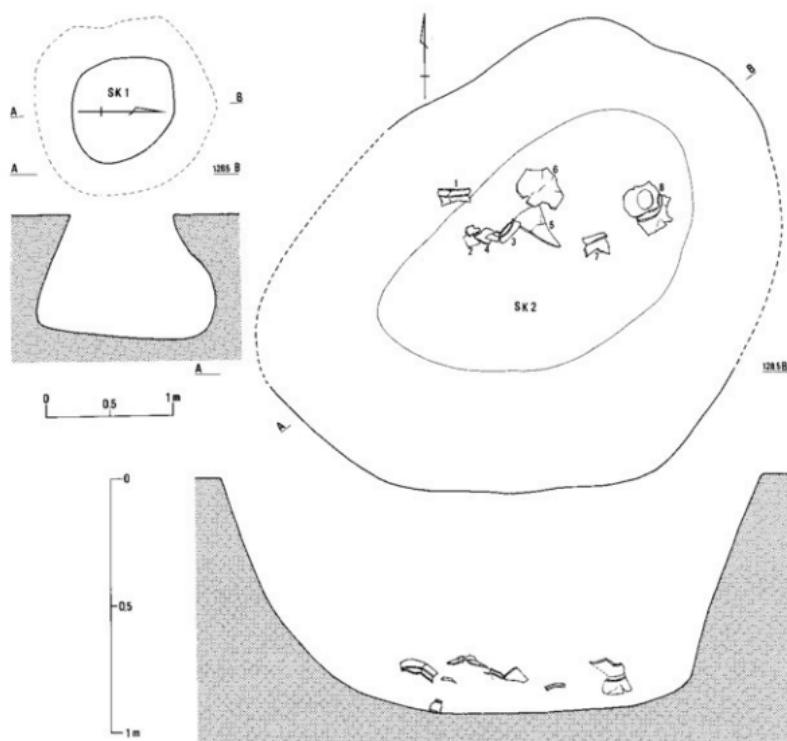
A-10で検出された土壙である。袋状土壙の底部が残っていたものと思われる。大きさは径139~165mm・深さは60mmである。土器の出土レベルはほぼ同じで一括廃棄されたものである。

第2表 土壌計測一覧表（第9～14図）

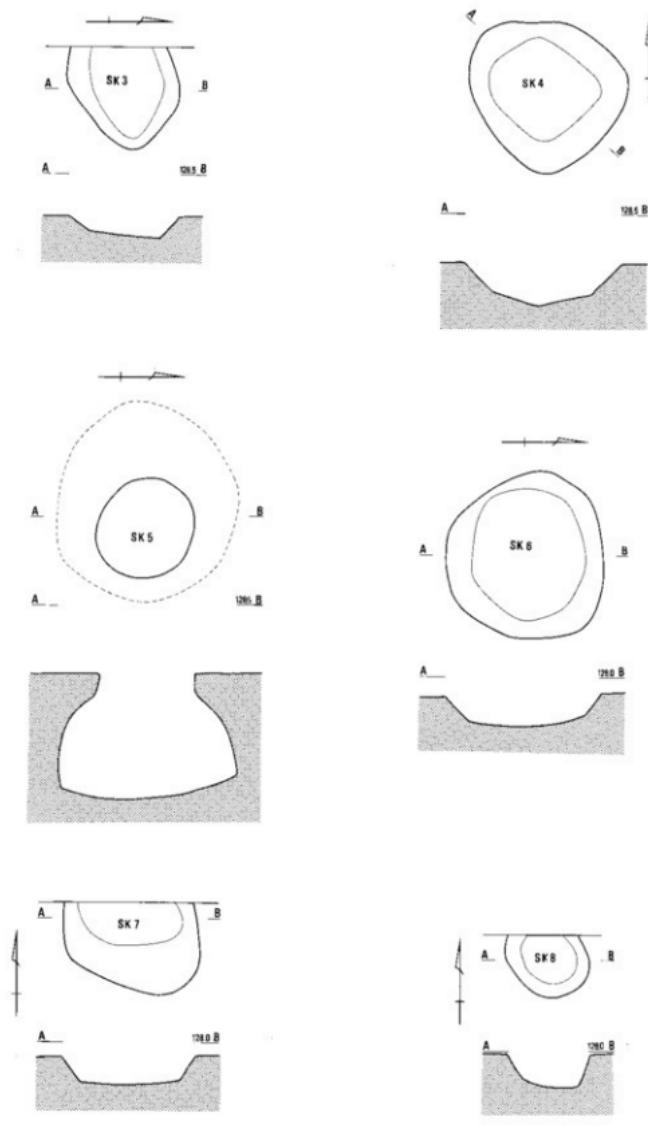
単位cm

| 番号 | 長径 | 短径 | 深さ | 備考 | 番号 | 長径 | 短径 | 深さ | 備考 |
|-----|-----|-----|----|-----------|----|-----|-----|----|-----------|
| SK1 | 93 | 77 | 97 | 袋状土壌 | 15 | 165 | 139 | 60 | 袋状土壌・SK11 |
| 2 | 213 | 166 | 93 | 井戸？ | 16 | 222 | 115 | 39 | 擾乱・SK10 |
| 3 | — | 87 | 22 | | 17 | — | 106 | 28 | 擾乱・SK9 |
| 4 | 125 | 111 | 34 | | 18 | 193 | — | 27 | SK24 |
| 5 | 81 | 74 | 97 | 袋状土壌 | 19 | 151 | 148 | 30 | SK20 |
| 6 | 131 | 126 | 23 | | 20 | 118 | 78 | 9 | 擾乱・SK23 |
| 7 | — | 105 | 24 | | 21 | 264 | 75 | 6 | 擾乱・SK22 |
| 8 | — | 58 | 26 | | 22 | 202 | 98 | 34 | 擾乱・SK21 |
| 9 | 482 | 330 | 66 | 擾乱 | 23 | 127 | 91 | 16 | 擾乱・SK19 |
| 10 | 100 | — | 45 | SK8 | 24 | 148 | 115 | 38 | SK18 |
| 11 | — | 99 | 28 | SK8-2 | 25 | 181 | 107 | 28 | SK17 |
| 12 | 92 | 88 | 19 | SK14 | 26 | 273 | 147 | 48 | SK16 |
| 13 | 118 | 90 | 28 | 擾乱 | 27 | 241 | 104 | 22 | 擾乱・SK15 |
| 14 | 130 | 119 | 38 | 祭祀土壌・SK12 | | | | | |

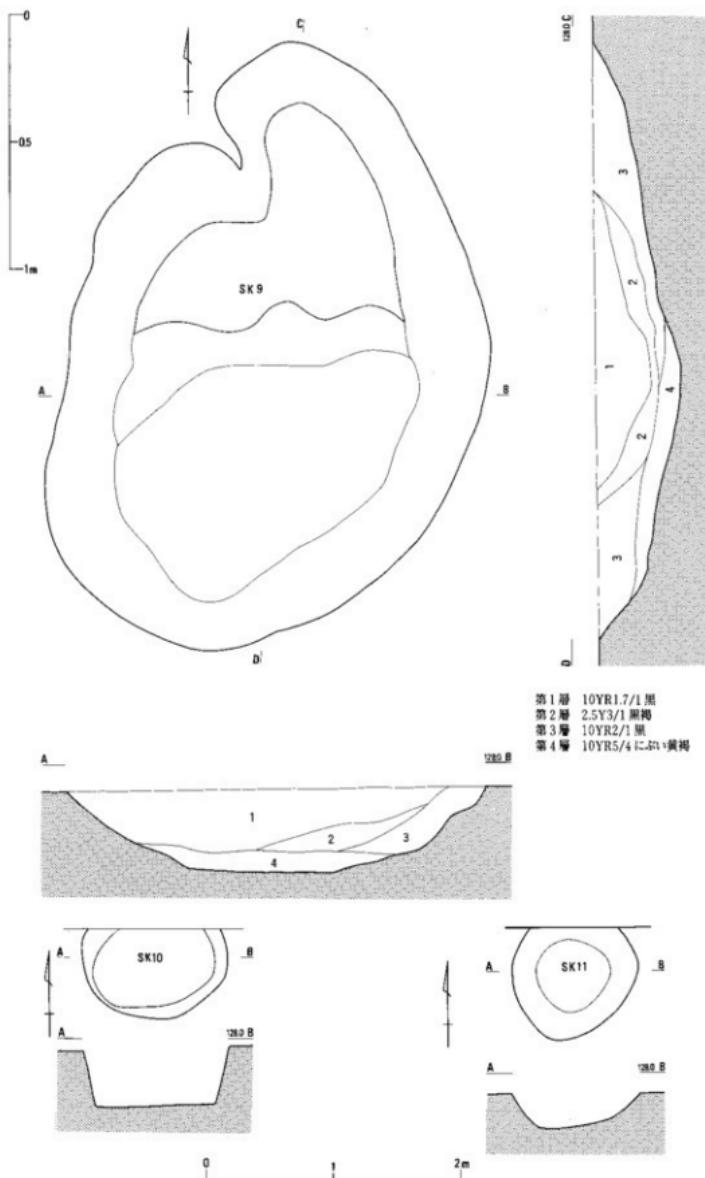
※備考欄中の遺構番号は旧（注記）番号である。



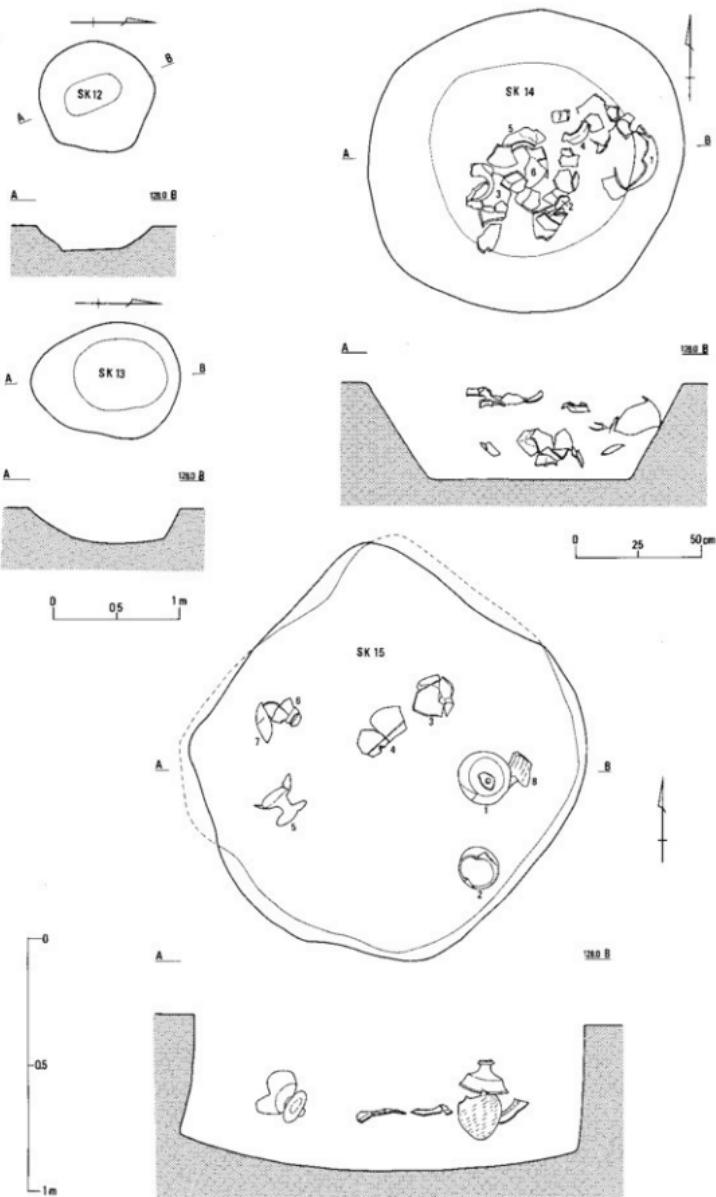
第9図 第1号・第2号土壌



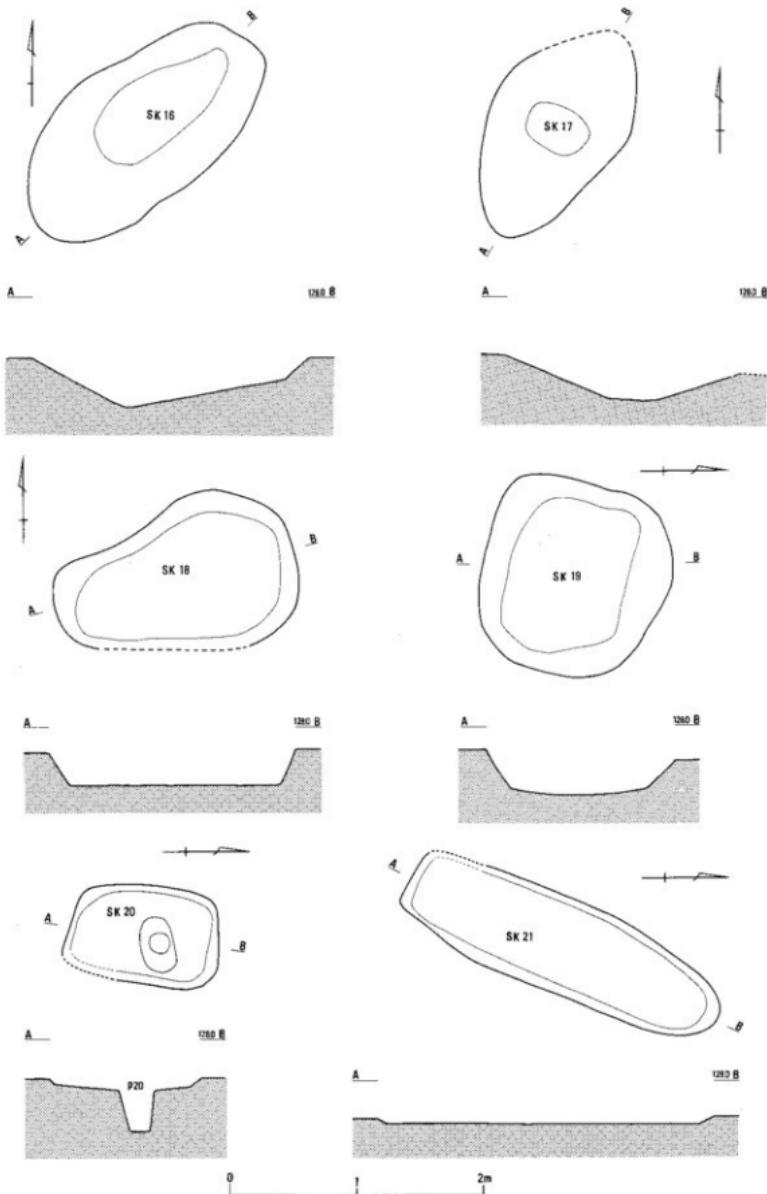
第10図 第3号～第8号土壤



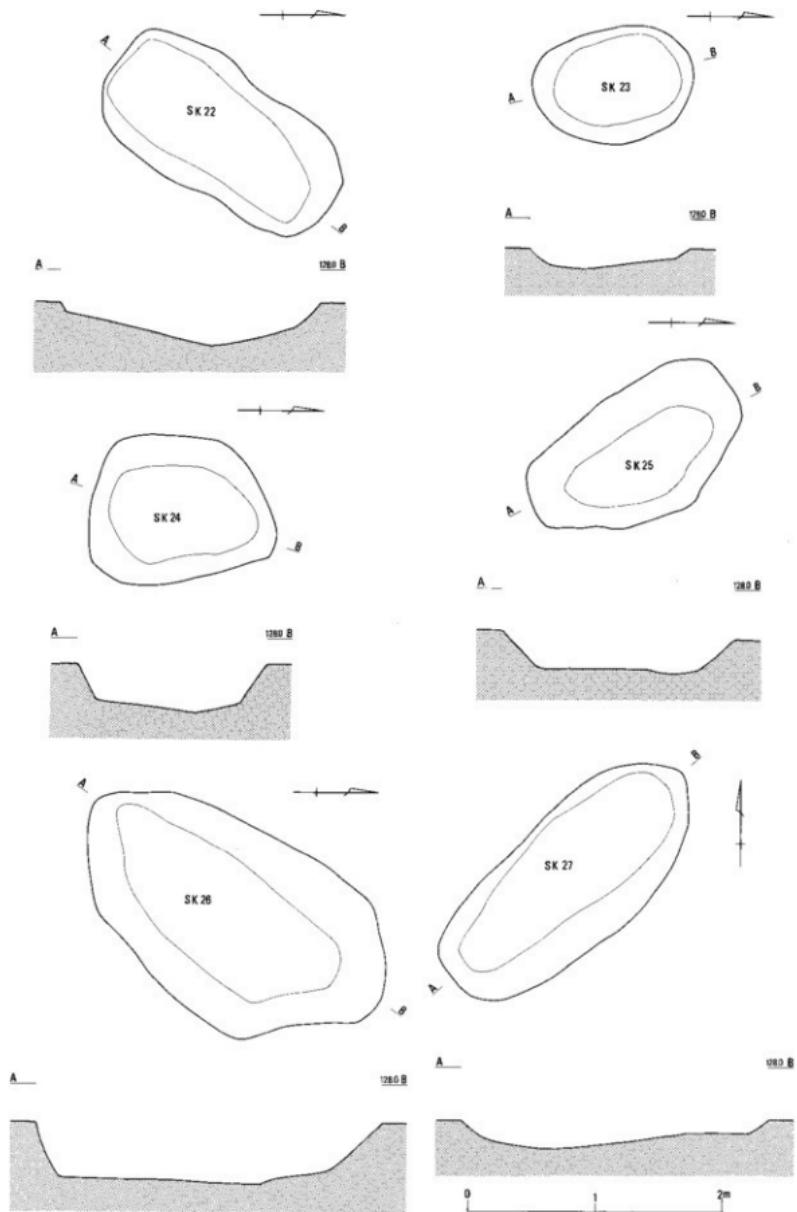
第11図 第9号～第11号土壤



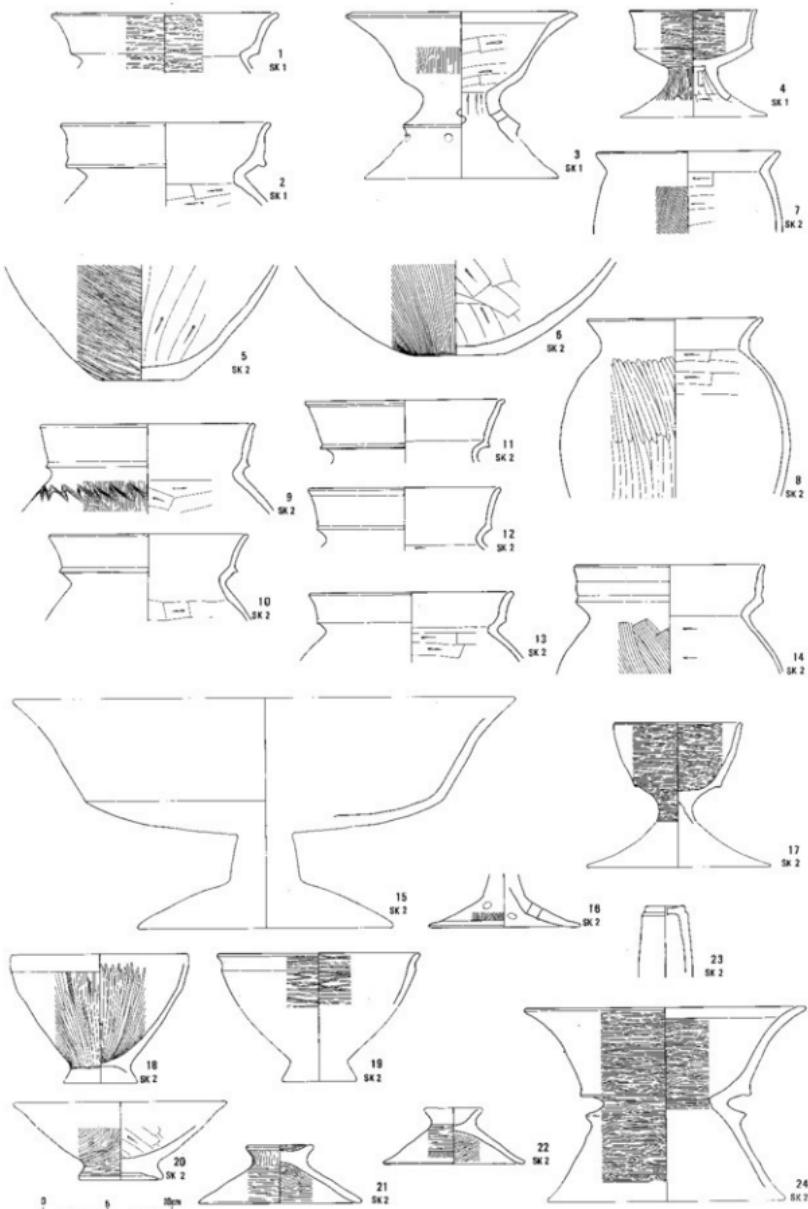
第12図 第12号～第15号土塚



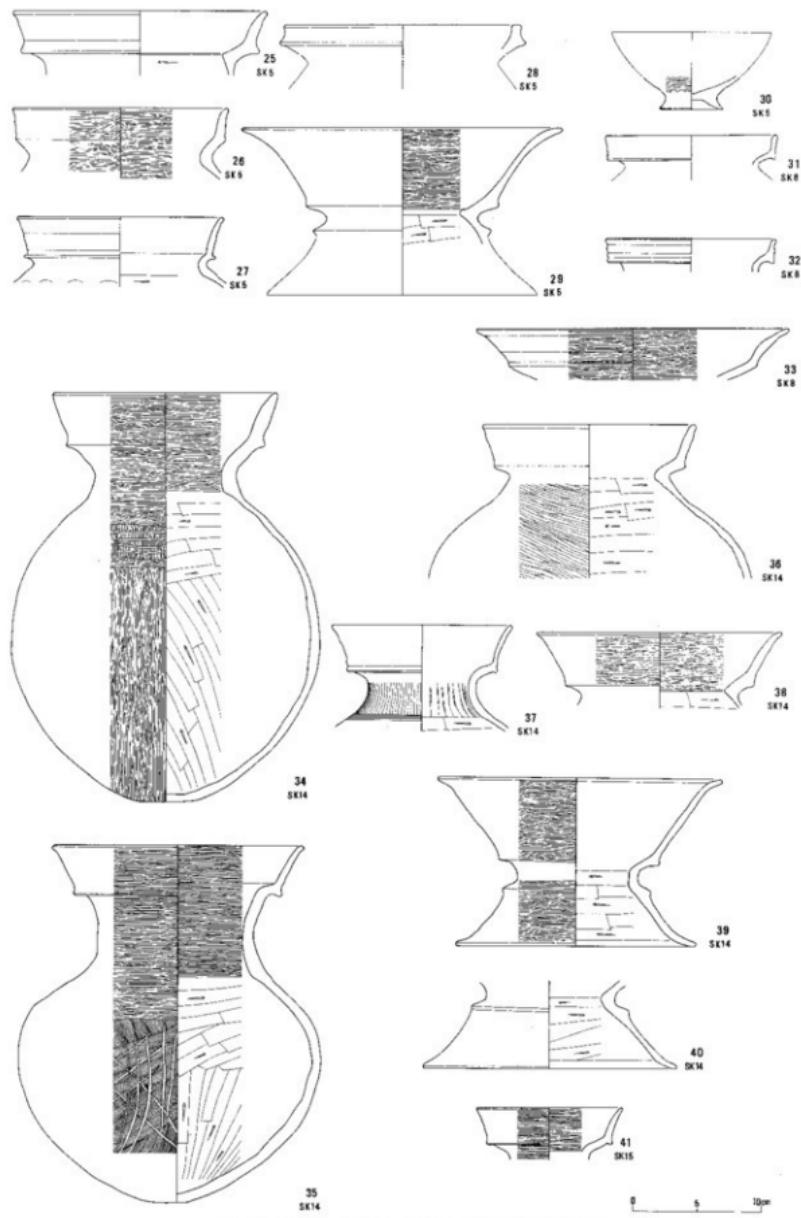
第13図 第16号～第21号土壤



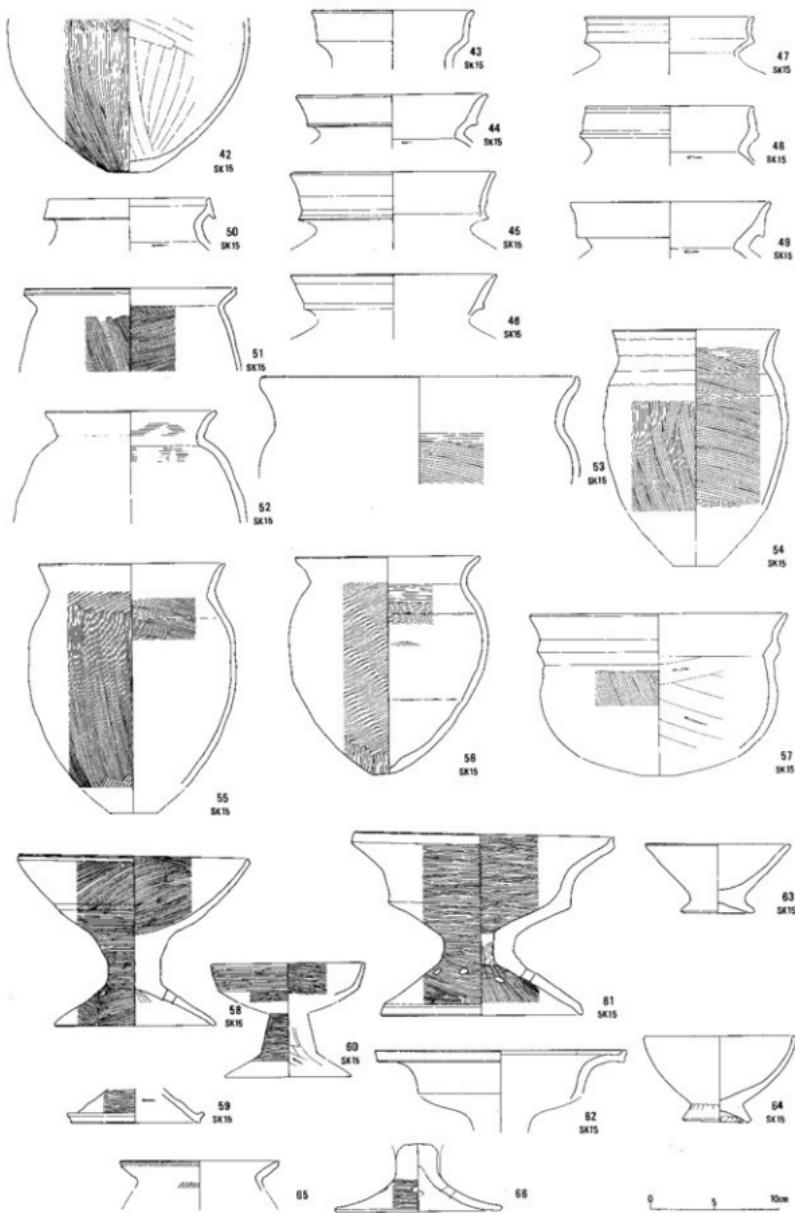
第14図 第22号-第27号土壤



第15図 第1号・第2号土壤出土遺物



第16図 第5号・第8号・第14号・第15号土壌出土遺物



第17図 第15号土塁出土遺物

土壤出土遺物観察表1 (第15図)

() は推定値: 単位cm

| 番号 | 器種 | 大きさ | 形態手法の特徴 | 胎土・焼成・色調 | 備考 |
|----|----|--------------------------------|---|---|--------------|
| 1 | 甕 | 口径17.3 現存高4.7 | 口縁部内外面鏡磨き。 | 細砂粒を含む。橙5YR6/6。焼成良好。 口縁部20%現存。 | SK1 |
| 2 | 甕 | 口径16.0 現存高6.5 | 口縁部横ナデ。 | 細砂粒を含む。にぶい黄橙10YR 6/3。焼成良好。焼きが硬い。口 縁部70%現存。 | タ |
| 3 | 器台 | 口径17.0 現存高10.2 | 口縁部外面は刷毛目の後に鏡磨き を施したと思われる。内面は鏡削り である。脚部の孔は上段が4孔、 下段が8孔である。 | 細砂粒を含む。にぶい橙7.5YR 7/4。焼成良好。口縁部90%現存。 | タ |
| 4 | 高坏 | 口径9.8 現存高7.2 | 口縁部内外面鏡磨き。脚部外面鏡 磨き、内面鏡削り。 | 細砂粒を含む。明赤褐2.5YR5/6。 焼成良好。坏部90%現存。 | タ |
| 5 | 壺 | 底径6.8 現存高9.0 | 胴部外面鏡磨き、内面鏡削り。平 底を呈する。 | 細砂粒・赤色粒子を含む。にぶい 赤褐5YR5/4。焼成良好。焼きが硬 い。底部100%現存。 | SK2 No. 6 |
| 6 | 壺 | 底径7.6 現存高7.4 | 胴部外面鏡磨き、内面鏡削り。 | 細砂粒を含む。にぶい黄橙7.5YR 7/4。焼成良好。底部90%現存。 | タ |
| 7 | 甕 | 口径14.0 現存高6.4 | 口縁部横ナデ。胴部外面刷毛目、 内面鏡削り。 | 細砂粒を含む。にぶい黄橙10YR 7/4。焼成良好。口縁部20%現存。 | タ |
| 8 | 甕 | 口径13.4 最大径17.9 現存高13.9 | 口縁部横ナデ。胴部外面は細かい 刷毛目ではなくナデと思われる。 叩き目は觀察できない。内面上端 は鏡削り。煤付着。 | 細砂粒を含む。にぶい黄褐10YR 5/3。焼成良好。口縁部40%・胴部 上半30%現存。 | タ |
| 9 | 甕 | 口径16.4 現存高7.0 | 口縁部横ナデ。胴部外面刷毛目、 内面鏡削り。肩部に櫛搔き波状文。 | 細砂粒を含む。にぶい橙7.5YR 7/4。焼成良好。焼きが硬い。口 縁部40%現存。 | タ |
| 10 | 甕 | 口径15.2 現存高6.8 | 口縁部横ナデ。胴部内面鏡削り。 ただし上端は削り残す。 | 細砂粒・赤色粒子・金雲母を含む。 にぶい橙7.5YR7/4。焼成良好。燒 きが硬い。口縁部20%現存。 | タ No. 1 |
| 11 | 甕 | 口径15.3 現存高4.9 | 口縁部横ナデ。 | 細砂粒・金雲母を含む。にぶい橙 5YR7/4。焼成良好。口縁部80% 現存。 | タ No. 3 |
| 12 | 壺 | 口径14.8 現存高4.9 | 口縁部横ナデ。胴部内面鏡削り。 | 細砂粒を含む。橙7.5YR6/6。焼成 良好。口縁部30%現存。 | タ |
| 13 | 甕 | 口径15.5 現存高5.5 | 口縁部横ナデ。胴部内面鏡削り。 | 細砂粒を含む。にぶい黄褐10YR 5/3。焼成良好。口縁部40%現存。 | タ |
| 14 | 甕 | 口径14.5 現存高8.5 | 口縁部横ナデ。胴部外面刷毛目、 内面鏡削り。 | 細砂粒を含む。橙7YR7/6。焼成良 好。口縁部20%現存。 | タ No. 7 |
| 15 | 高坏 | 現存高8.3 口径(39.0) | 表面の調整は不明。高坏の坏部の 破片と考えた。胎土は供獻土器の ものである。 | 微砂粒・赤色粒子を含み精製され ている。橙5YR6/6。焼成良好。坏 部20%現存。 | タ No. 5 |
| 16 | 高坏 | 底径11.8 現存高4.2 | 外面に明瞭な鏡磨きが觀察できな い。刷毛目の後にナデのように見 える。3孔と思われる。 | 微砂粒を含み精製されている。明 赤褐5YR5/6。焼成良好。脚部20% 現存。 | タ |
| 17 | 高坏 | 口径9.8 現存高7.7 | 口縁部内外面鏡磨き。高坏にして は胎土が粗い。 | 石英の粗砂粒を含む。明赤褐 2.5YR5/6。スリップないしは赤彩。 焼成良好。坏部70%現存。 | タ |
| 18 | 坏 | 口径(13.5) 現存高8.9 器高(10.0) | 口縁部外面刷毛目の後鏡磨き、内 面鏡磨き。 | 細砂粒を含む。にぶい黄橙10YR 7/3。焼成良好。体部30%・底部 70%現存。 | タ No. 2 |
| 19 | 坏 | 口径15.5 現存高4.2 | 口縁部内外面鏡磨き。 | 細砂粒・金雲母・赤色粒子を含む。 にぶい黄褐10YR4/3。焼成良好。 焼きが硬い。口縁部20%現存。 | タ |
| 20 | 坏 | 現存高4.2 底径5.3 | 体部外面刷毛目の後鏡磨き。内面 鏡削りの後ナデ。 | 細砂粒を含む。明赤褐2.5YR5/6。 焼成良好。40%現存。 | タ |

土壌出土遺物観察表2（第15・第16図）

()は推定値：単位cm

| 番号 | 器種 | 大きさ | 形態手法の特徴 | 胎土・焼成・色調 | 備考 |
|----|----|--|--|--|--------------|
| 21 | 蓋 | 口径12.4 摘径4.9 器高4.6 | 口縁部内外面鏡磨き。 | 細砂粒・金雲母を含む。にぶい橙7.5YR7/4。焼成良好。40%現存。 | SK2 No.4 |
| 22 | 蓋 | 口径10.7 摘径4.3 | 体部外面刷毛目の後鏡磨き、内面鏡磨き。 | 細砂粒・金雲母を含む。にぶい黄橙10YR6/4。焼成良好。40%現存。 | タ |
| 23 | 器台 | 現存高5.5 | 柱状部内外面の調整・成形は不明であるが、内面が平滑なので丁寧な鏡削りと思われる。柱状部の頭を径4°の棒で上から突き刺して孔を開けている。 | 細砂粒を含むが量は少ない。にぶい橙5YR6/4。焼成良好。柱状部30%現存。 | タ |
| 24 | 器台 | 口径21.6 現存高13.6 | 口縁部内外面鏡磨き、内面上端を強く横ナデ。脚部外面鏡磨き、内面鏡削りの後ナデ。 | 細砂粒を含む。にぶい橙7.5YR6/4。焼成良好。50%現存。 | タ No.8 |
| 25 | 壺 | 口径19.45 現存高5.0 | 口縁部内外面横ナデ。胴部内面鏡削り。 | 細砂粒を含む。橙5YR7/6。焼成良好。口縁部20%現存。 | SK5 |
| 26 | 壺 | 口径16.5 現存高5.5 | 口縁部内外面鏡磨き。胴部内外面鏡磨き。 | 細砂粒を含む。にぶい黄橙10YR7/4。焼成良好。口縁部10%現存。 | タ |
| 27 | 壺 | 口径15.8 現存高5.4 | 口縁部横ナデ。肩部に櫛引き波状文、内面は鏡削り。口縁部を強く横ナデして突奇を作る。 | 細砂粒・金雲母を含む。特に石英が多い。浅黄橙7.5YR8/4。焼成良好。口縁部10%現存。 | タ |
| 28 | 壺 | 口径18.2 現存高2.3 | 口縁部横ナデ。煤付着。 | 細砂粒・赤色粒子を含む。にぶい黄橙。10YR7/4。焼成良好。口縁部10%現存。 | タ |
| 29 | 器台 | 口径24.3 現存高9.0 | 口縁部外面不明。内面鏡磨き。脚部内面鏡削り。 | 細砂粒を含む。橙7.5YR7/6。焼成良好。口縁部20%現存。 | タ |
| 30 | 壺 | 底径4.8 現存高2.6 | 体部外面鏡磨き。 | 細砂粒・赤色粒子を含む。橙7.5YR6/6。焼成良好。脚部70%現存。 | タ |
| 31 | 壺 | 口径13.2 現存高2.3 | 口縁部横ナデ。 | 細砂粒・金雲母を含む。浅黄橙10YR8/3。焼成良好。口縁部10%現存。 | SK8 |
| 32 | 壺 | 口径13.2 現存高2.6 | 口縁部横ナデ。 | 細砂粒を含む。浅黄橙10YR8/3。焼成良好。口縁部10%現存。 | タ |
| 33 | 高壺 | 口径24.1 現存高4.0 | 口縁部内外面鏡磨き。 | 微砂粒・赤色粒子を含む。胎土は精製されている。橙7.5YR7/6。焼成良好。焼きが硬い。口縁部10%現存。 | タ |
| 34 | 壺 | 口径17.2 最大径24.0 底径5.0 器高31.9 | 口縁部内外面鏡磨き。胴部外面鏡磨き、内面鏡削り。平底である。 | 細砂粒を含む。外面にぶい黄橙10YR7/4、内面10YR3/1。焼成良好。90%現存。 | SK14 No.2 |
| 35 | 壺 | 口径17.3 最大径23.6 底径(3.6) 器高27.8 | 口縁部・頭部内外面鏡磨き。胴部外面上半鏡磨き、下半刷毛目の後鏡磨き。胴部内面鏡削り。ほとんど丸底であるが底部らしき部分は存在する。 | 微砂粒を含む。精製され緻密な胎土。赤彩の色はにぶい赤褐2.5YR5/6、土器の色はにぶい黄橙10YR7/3。焼成良好。100%現存。 | タ No.1 |
| 36 | 壺 | 口径16.3 現存高12.0 | 口縁部横ナデ。胴部外面鏡磨き、内面鏡削り。 | 粗砂粒を含む。明赤褐5YR5/6。赤彩ではなくスリップを施している。焼成良好。口縁部70%現存。 | タ No.3 |
| 37 | 壺 | 口径13.8 現存高8.2 | 口縁部内外面調整不明。頭部外面鏡磨き。肩部に4条の平行沈線文をもつ、内面鏡削り。 | 細砂粒を含む。にぶい黄橙10YR7/4。焼成良好。口縁部20%・頭部100%現存。 | タ No.4 |
| 38 | 壺 | 口径18.9 現存高5.9 | 口縁部内外面鏡磨き、胴部内面上端鏡削り。 | 細砂粒を含む。にぶい黄橙10YR6/4。焼成良好。口縁部20%現存。 | タ No.7 |
| 39 | 器台 | 口径22.0 | 口縁部外面鏡磨き、内面は逆時 | 細砂粒を多く含む。にぶい橙7.5YR | タ |

土壤出土遺物観察表3 (第16・第17図)

() は推定値: 単位cm

| 番号 | 器種 | 大きさ | 形態手法の特徴 | 胎土・焼成・色調 | 備考 |
|----|----|--------------------------------------|---|--|--------------|
| 39 | | 底径18.5 器高13.1 | 計回りの窓削りの後にナデか。脚部外面磨き、内面窓削り。口縁・脚部の端を強く横ナデしている。 | 7/4。焼成良好。70%現存。 | SK14 No.5 |
| 40 | 器台 | 底径19.5 現存高6.8 | 脚部外面横ナデ、内面窓削り。 | 繊砂粒・赤色粒子を含む。橙7.5YR7/6。焼成良好。脚部70%現存。 | タ No.6 |
| 41 | 壺 | 口径11.2 現存高4.1 | 口縁部内外面丁寧な窓磨き。 | 繊砂粒を含む。胎土は精製されている。明赤褐色5YR5/6。焼成良好。焼きが硬い。口縁部10%現存。 | SK15 |
| 42 | 壺 | 底径3.4 最大径18.8 現存高12.0 | 胴部外面刷毛日の後窓磨き、内面窓削りの後ナデか。小さい平底をもつ。胴中央部に煤付着。 | 繊砂粒・赤色粒子を含む。にぶい黄橙10YR6/4。焼成良好。胴部下半40%・底部100%現存。 | タ |
| 43 | 壺 | 口径12.3 底径4.6 | 口縁部横ナデ。煤付着。 | 繊砂粒・赤色粒子・金雲母を含む。橙7.5YR7/6。焼成良好。口縁部20%現存。 | タ |
| 44 | 壺 | 口径14.7 現存高4.2 | 口縁部横ナデ。作りが丁寧である。 | 繊砂粒を含む。にぶい黄橙10YR7/3。焼成良好。口縁部20%現存。 | タ |
| 45 | 壺 | 口径15.5 現存高3.9 | 口縁部横ナデ。煤付着。 | 細かい長石粒を含む。黒褐色10YR3/1。焼成良好。焼きが硬い。口縁部10%現存。 | タ |
| 46 | 壺 | 口径15.8 現存高3.2 | 口縁部横ナデ。 | 赤色粒子を含む。胎土は精製されている。外面黒褐色10YR3/1、内面にぶい黄橙10YR6/4。焼成良好。口縁部10%現存。 | タ |
| 47 | 壺 | 口径12.9 現存高3.1 | 口縁部横ナデ。 | 繊砂粒・赤色粒子を含む。にぶい黄橙10YR7/4。焼成良好。口縁部10%現存。 | タ |
| 48 | 壺 | 口径12.8 現存高4.6 | 口縁部横ナデ。胴部内面窓削り。 | 繊砂粒・赤色粒子を含む。にぶい橙5YR6/4。焼成良好。口縁部10%現存。 | タ |
| 49 | 壺 | 口径15.4 現存高4.4 | 口縁部横ナデ。胴部内面窓削り。 | 繊砂粒を含む。橙5YR6/6。焼成良好。口縁部20%現存。 | タ |
| 50 | 壺 | 口径12.4 現存高4.1 | 口縁部横ナデ。胴部内面上窓削り。 | 繊砂粒を含む。外面黒褐色2.5YR5/6、内面橙5YR7/6。焼成良好。口縁部10%現存。 | タ |
| 51 | 壺 | 口径16.3 現存高6.5 | 口縁部横ナデ。端部は摘まんで横ナデした分だけ立ち上がる。胴部外面は叩き目を目の細かい刷毛状工具でナデ消す、内面も目の細かい刷毛目。 | 繊砂粒を含む。在地土器の胎土である。にぶい黄2.5Y6/3。焼成良好。焼きが硬い。口縁部・胴部10%現存。 | タ |
| 52 | 壺 | 口径13.1 現存高8.8 | 口縁部横ナデ。胴部は外面ナデ、内面刷毛目の後ナデ。 | 繊砂粒を含む。橙5YR6/6。焼成良好。口縁部40%現存。 | No.8 |
| 53 | 鉢 | 口径24.4 現存高8.3 | 口縁部横ナデ。胴部外面ナデ、内面刷毛目。戻内系か。 | 繊砂粒を含む。にぶい橙5YR6/4。焼成良好。口縁部10%現存。 | タ |
| 54 | 壺 | 口径12.8 最大径14.4 現存高14.2 | 口縁部ナデ。胴部外面は刷毛日、粘土接合痕を残す。内面は刷毛目。叩き目は観察できない。煤付着。作りは粗い。 | 繊砂粒を含む。在地土器の胎土である。にぶい黄褐色10YR5/3。焼成良好。70%現存。 | タ |
| 55 | 壺 | 口径14.3 最大径16.1 現存高17.5 | 口縁部軽い横ナデ。胴部外面は叩き目を刷毛で消す、内面上縁は刷毛目、これより下はナデ。 | 繊砂粒が多い。在地土器の胎土である。橙5YR6/6。焼成良好。70%現存。 | No.3 No.7 |
| 56 | 壺 | 口径14.2 最大径15.5 底径1.7 器高17.1 | 口縁部横ナデ。胴部外面は右上がりの連続ラセン状叩きを施し、最後に底部周辺を叩いて小さい平底を作る。叩き目は1ヶ当り3~4 | 繊砂粒・赤色粒子・金雲母を含む。外面灰黄褐色10YR4/2、内面明赤褐色5YR5/6。焼成良好。焼きが硬い。90%現存。胴部中・上位から | タ |

土壌出土遺物観察表4 (第17図)

() は推定値: 単位cm

| 番号 | 器種 | 大きさ | 形態手法の特徴 | 胎土・焼成・色調 | 備考 |
|----|----|-----------------------------|---|---|-----------------------|
| 56 | | | 条。内面上半は逆時計回りの刷毛目、下半はナデ。底部内面中央は小さく窪む。絞りの痕かもしれない。 | 口縁部にかけて焼付着。 | SK15 No.2 |
| 57 | 鉢 | 口径19.8 胴径18.4 現存高11.2 | 口縁部横ナデ。脚部外面刷毛目の後ナデ、内面鋸削り。焼付着。 | 粗砂粒を含む。にぶい黄橙10YR6/4。 焼成良好。口縁部40%現存。 | タ No.4 |
| 58 | 高杯 | 口径17.8 底径12.3 器高13.5 | 口縁部外面・柱状部・脚部外面 鋸磨き。脚部内面刷毛目の後横ナデ。脚部に3孔を有する。 | 細砂粒を含む。明赤褐2.5YR5/6。 赤彩。焼成良好。90%現存。 | タ No.5 |
| 59 | 高杯 | 口径9.9 現存高2.6 | 脚部を横ナデした後、外表面を鋸磨き。小型器台かもしれない。 | 細砂粒・赤色粒子を含む。橙7.5YR7/6。焼成良好。10%現存。 | タ |
| 60 | 高杯 | 口径11.8 現存高(8.0) | 口縁部外面に7条の平行沈線文を施した後に内面とも鋸磨き。柱状部外面鋸磨き、内面鋸削り。 | 微砂粒を含む。精製された胎土である。外面明赤褐2.5YR5/6、内面褐7.5YR6/4。焼成良好。口縁部20%・柱状部50%現存。 | タ |
| 61 | 器台 | 口径20.1 底径15.5 器高14.4 | 口縁部外面・柱状部外面鋸磨き。柱状部内面にシボリ目を残す。脚部外面は鋸磨き、内面は縱方向の刷毛目。脚端部外面を横ナデ。脚部に7孔を有する。 | 微砂粒を含む。精製された胎土である。橙5YR6/6。焼成良好。90%現存。 | タ No.1 |
| 62 | 器台 | 口径19.4 現存高3.8 | 調整不明。 | 細砂粒を含む。高杯の胎土としては粗い。橙5YR7/6。焼成良好。口縁部60%現存。 | タ |
| 63 | 杯 | 口径11.1 底径5.0 器高5.4 | 口縁部・脚部横ナデ。 | 微砂粒・赤色粒子を含む。精製された胎土である。橙5YR7/8。焼成良好。60%現存。 | タ |
| 64 | 杯 | 口径11.5 底径5.0 器高6.8 | 口縁部横ナデ。脚部内外面指頭による押え。 | 細砂粒を含む。にぶい黄橙10YR7/4。焼成良好。80%現存。 | タ No.6 |
| 65 | 壺 | 口径12.2 現存高2.3 | 口縁部横ナデ。口縁端部に段をもつ。口縁部の下端に叩き目消し残しがある。胴部外面叩き、内面ナデないしは刷毛目。 | 細砂粒を含む。在地土器の胎土である。橙7.5YR7/6。焼成良好。焼きが硬い。口縁部10%現存。 | SK2を切る圃場整備暗渠排水出土参考資料。 |
| 66 | 高杯 | 底径12.7 現存高5.3 | 脚部外面鋸磨き、内面の調整は不明。脚部に4孔か。 | 細砂粒を含む。明赤褐2.5YR5/6。焼成良好。脚部30%現存。 | タ |

d 柱穴

第3表 柱穴計測一覧表

単位cm

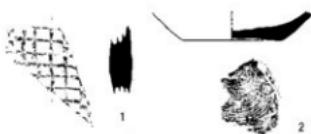
| 番号 | 長径 | 短径 | 深さ | 備考 | 番号 | 長径 | 短径 | 深さ | 備考 |
|----|----|----|----|----------|----|----|----|----|----------|
| P1 | 64 | 50 | 23 | A-9 | 9 | 56 | 46 | 19 | A-5 P16 |
| 2 | 75 | 65 | 34 | タ | 10 | 63 | 57 | 27 | A-15 P24 |
| 3 | 61 | 57 | 22 | タ | 11 | 61 | 55 | 23 | A-16 P22 |
| 4 | 50 | 41 | 26 | タ | 12 | 51 | 51 | 21 | A-23 P23 |
| 5 | 42 | 42 | 26 | A-4 P9 | 13 | 86 | 66 | 24 | A-16 P21 |
| 6 | 51 | 44 | 32 | A-11 P11 | 14 | 67 | 52 | 22 | A-17 P20 |
| 7 | 63 | 47 | 36 | A-5 P13 | 15 | 43 | 37 | 16 | A-24 P19 |
| 8 | 35 | 30 | 15 | タ P12 | 16 | 45 | 26 | 32 | A-18 P23 |

※備考欄のピット番号は旧(注記)番号である。

e 溝

第1号溝

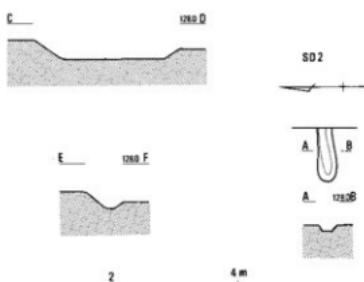
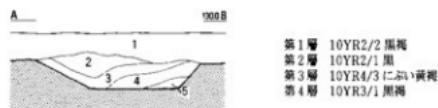
A-13で検出された溝である。長さは14.55m、幅は最も広いところで2.7m、深さは確認面から最も深いところが42cmである。この溝は2条の溝が重複したもので、土層断面図の第2・3層と第4・5層は二つの溝の重複関係を表している。溝の西8.03mが幅60cm程に狭まっているのはこのためである。水の流れた形跡はないが溝底の深さは西側が高く東に行くに従い低くなる。出土遺物には弥生土器が多いがこれらはいずれも混入である。この溝が造られた時期に最も近い時期の遺物は二点の勝間田焼と考えている。1は壺の破片で外面に格子目叩きを施し、内面の当て具の跡を粗くナデ消している。焼成は不良で色調は黄橙色を呈している。2は底部を糸切りした須恵器坏でこの土器も焼成不良で色調は黄橙色を呈している。出土した須恵器の時期は12世紀頃と推定される。



第18図 第1号溝出土遺物 (1:3)

第2号溝

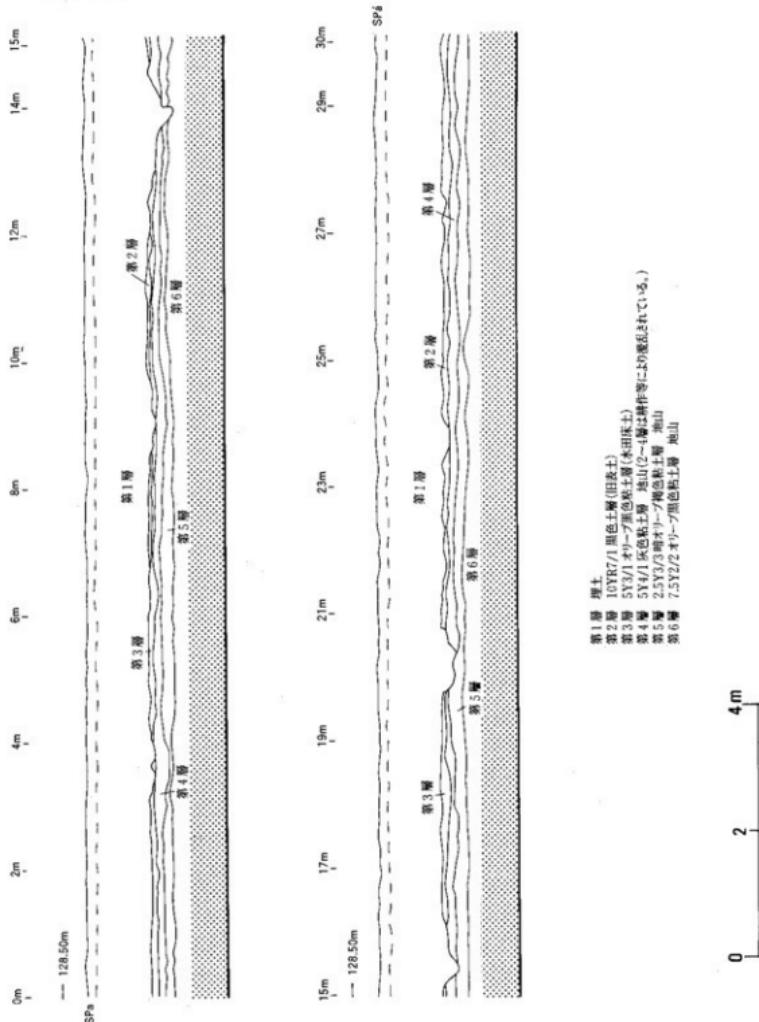
A-20で検出された溝である。長さは84m、幅は最も広いところで29m、深さは確認面から9mである。遺物は出土していない。



第19図 第1号・第2号溝

3 B区の概要と調査

B区は検査所の建設予定地であり、発掘調査対象区域であった。しかし、表土剥ぎの段階で遺構確認面を把握するために掘り下げる結果、圃場整備以前の水田を埋め立てた跡であることが分かった。このため予定を変更して2本のトレンチを入れ、遺構の存在しないことを確認するにとどめた。



第20図 B区第1号トレンチ土層断面図

第Ⅳ章 薬師前遺跡出土土器について

はじめに

今回の発掘調査では幸運にも極めて遺存状態の良好な弥生時代後期末の土器群を検出することができた。今後、吉井川上流域・香々美川流域における当該期の土器の検討を行う場合に、製作技法等を明瞭に識別できるこの土器群が当地域の土器研究の叩き台となるのは明白である。そこで、筆者はこれらの土器群の理解を容易にするために、遺跡・遺構の状態から順を追って説明し、拙論ではあるが出土土器について筆者の考えるところを明らかにしたい。

1 発見された遺跡の状態

薬師前遺跡で検出された遺構は、住居跡1、掘立柱建物跡3、土壙27、柱穴16、溝2である。このうち弥生時代後期末の遺構は住居跡1、土壙5（袋状土壙3、祭祀土壙1、井戸1）、掘立柱建物跡2である。他の遺構は中世の遺構と考えられる溝と圃場整備の際の重機による攪乱、葡萄のハウス栽培による攪乱と考えている。また、今回の発掘調査において検出された遺構数が少ないのは、遺跡の外縁部を調査したためと推測している。A区で検出された遺構の大半が攪乱土壙であるのは圃場整備による破壊だけではなく、もともと遺跡外縁部のため遺構の存在が希薄だったらしい。遺跡の中心部はA区の北側と推定しており、現在は畑として用いられているため良好な状態で保存されている。

2 検出された遺構

薬師前遺跡で検出された遺構を整理すると、まず第1号・第2号掘立柱建物跡の重複関係が注目される。第1号掘立柱建物跡の柱穴であるP4からは叩き目を刷毛状工具でナデ消した壺の破片が纏って出土していることから、立替えの際に柱の抜き取りがあり、この後に土器が埋納されたと考えている。この土器は第15号土壙出土土器と同時期と推定できることから、土器が柱穴に埋納されたのは、第15号土壙に土器が一括廃棄された時期に極めて近いものとできる。そして、この第1号掘立柱建物跡と重複しているのが第2号掘立柱建物跡であり、両者の新旧関係は全く不明なのだが、遺跡の存続期間が掘立柱建物の耐用年数を上回るだけの年数、つまり立替えを要するだけの時間幅があったと考える根拠になる。もう一つは第1号住居跡と第1号・第2号土壙の位置関係である。第1号住居跡が本当に住居跡であるならば、上屋構造等の問題からこの二つの土壙との同時存在はあり得ない。

3 土器の出土状態

第1号土壙出土土器はいずれ中層より出土したものであるが一括廃棄は確認されていない。このなかで特筆すべき土器は1である。この土器は口縁端部内面が強く横ナデされて面をなし、鼓形器台の製作技法の特徴をもっている。第5号・第8号土壙出土土器も一括廃棄は確認できていない。

第2号土壙出土土器は5・10・11・14・15・21・24がほぼ同一レベルからの出土であり、これらは一括廃棄された土器である。第2号土壙出土土器には一括廃棄された土器と比べて際立って新・古相を呈する土器がないので、出土レベルと層位は不明であるがあえて図化した13点の土器も、一括廃棄の確認できた5・10・11・14・15・21・24と同時期か、場合によればいくらか新しいものとできよう。また、このなかで特筆すべき土器は17である。出土層位やレベルが確認できなかったのは残念だが、当地方では出土の希な東海系小型高杯と考えている。

第14号土壙は祭祀土壙と考えられる遺構で出土土器は壺と鼓形器台に限られている。これらの土器

は確実に一括廃棄されたものでいかなる混入も考えられない。そして、ここで出土した34・35の壺は第2号土壙から出土した壺より明らかに丸底化が進んでいる。このことが時期の違いを示すものか、土器の用途により丸底化の度合いに違いがあったのかは今後の課題となろう。

第15号土壙は袋状土壙の底部が遺存していたものである。いずれの土器も土壙底部より浮いて出土しているが、52・55・56・57・58・61・64は出土レベルがほぼ同一で一括廃棄されたものである。また、出土レベルは確認できていないが53は畿内系の片口大型鉢である。

今回の発掘調査では良好な資料を得ることができたが、共伴関係の確認できる資料は決して多くない。また、図化しなかったが明らかに攪乱と思われる土壙からも土器が出土している。これら攪乱から出土する土器は勝間田焼や土釜といった中世の遺物と弥生時代後期末の土器であり、数点に限り櫛描波状文を施した弥生時代中期後葉の土器片があった。

4 胎土

薬師前遺跡出土土器は播磨系、伯耆・因幡系、東海系と多彩であるが搬入土器はないと考えている。播磨からの搬入土器の目安とされている金雲母を含む土器がかなり存在するが、ほとんどは伯耆・因幡系の土器である。第15号土壙から出土した壺も金雲母を含み胎土は橙色系である。これについては播磨からの搬入土器の可能性も考えられるが、薬師前遺跡出土土器は基本的には在地産の土器と認識している。胎土の鉱物組成は白色の長石と透明な石英を主体として、これに金雲母、赤色粒子（焼土塊）が加わるが、角閃石、輝石はまったく含まれていない。砂礫構成については専門的な分析を経てないので断定はできないが、鉱物組成から花崗岩系の砂礫構成と推定している。

5 研究抄史

中部瀬戸内地方の所謂「古式土師器」研究は酒津式土器（以下「酒津式」とする。他もこれに倣う。）の評価から始まっている。酒津式は1958年間壁忠彦により提唱されたのであるが、この頃鎌木義昌が上東II式としていたものは酒津式を含み、平底を理由に弥生後期の土器との位置づけがなされていた（鎌木義昌1955 1958）。柳瀬昭彦は従来上東式と呼ばれていたものを鬼川市I・II・III式に細分し、さらに弥生時代最終末の土器型式として才の町I式を設定した。また、これに続く才の町II式と下田所式、小若江北式（布留2式）に若干先行する亀川上層式の三型式を設定して、才の町II（酒津）式以降を古式土師器とした（柳瀬昭彦1974 1977）。才の町I式・才の町II式・下田所式の識別について、柳瀬は才の町I式を上東式と酒津式の中間的なものと捉えたうえで、長頸壺の消滅、壺口縁端部を小さく立ち上がらせたものと口縁端部を上方に大きく拡張させたものの出現、高坏脚柱部の短脚化という点を重要な要素として、才の町II式については酒津式に併行するものと考え、口縁部に退化凹線を施した壺の出現をメルクマールとした。また、下田所式については口縁部に櫛描き平行沈線文を施した壺の出現を重視して、これまで才の町II式と下田所式が酒津式の新・古相に対応するとしていたのを改め、下田所式は酒津式に後出するものとした。柳瀬が酒津式を古式土師器とする点は、共に上東遺跡の発掘調査を担当した藤田恵司と同じであるが（藤田恵司1979）、下田所式の評価について両者の見解は違ったものになっている。

藤田による中部瀬戸内地方における土器研究の特徴と成果は、中部瀬戸内地方と山陰地方の弥生時代後期から古墳時代前期にかかる土器の併行関係を明らかにした上で、山陰地方の鍵尾式は2つに分離する必然性のないこと、この土器型式が弥生土器に帰属すべきものであること、鍵尾式と小谷式の間にヒアタスがあり、もう一型式設定する必要があることを明らかにした点にあり、中国地方山間部

の弥生土器・土師器研究には現在もなくてはならない貴重な研究である。

その後、1977年以来行われてきた百間川遺跡の発掘調査が進行した結果、中部瀬戸内地方の弥生土器・土師器編年骨子となる編年案が江見正己により提示され（江見正己1980）、津寺遺跡の編年にも踏襲されている。江見による弥生時代後期から古墳時代前期の土器編年の特徴は、鬼川市Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ式を新たに百間川後期Ⅰ・Ⅱ・Ⅲとした上で、才の町Ⅰ・Ⅱ式を百間川後期Ⅳと捉え、これを弥生土器として酒津式に併行するとした点である。また、これに続く土器型式として、下田所式・亀川上層式・川入大溝上層式には対応する百間川古墳時代Ⅰ・Ⅱ・Ⅲを設定した。この編年の特徴は、鬼川市Ⅲ式に対応する百間川後期Ⅲを長頸壺の最終段階と見なし、才の町Ⅰ・Ⅱ（酒津）式に対応する百間川後期Ⅳのメルクマールを口縁部に擬円線をもつ壺の出現、下田所式に対応する百間川古墳時代Ⅰのそれを口縁部に櫛描平行沈線文をもつ壺の出現、亀川上層式には対応する百間川古墳時代Ⅱの特徴として壺口縁部の櫛描平行沈線文の退化と壺・壺の丸底化を挙げ、これ以降から須恵器出現までを百間川古墳時代Ⅲとした。さらに江見は、百間川古墳時代Ⅰが新田サイフォン井戸-2出土遺物、左岸用水D-3出土遺物、新田橋門微高地西斜面土器溜り上層出土遺物により古・中・新相の3段階に細分でき、百間川古墳時代Ⅰの古相を呈する新田橋門井戸-2より小型器台の破片が出土していることを指摘している。

しかし、このような土器研究の進展の一方で、入倉徳裕のように藤田の考えを支持して才の町Ⅱ式と下田所式を酒津式の範疇で捉え、両型式の特徴とされる壺口縁の技法の違いを新・古の基準とする考えも依然として存在している（入倉徳裕1996）。入倉が酒津式として図示した資料には、江見が百間川古墳時代Ⅰの古相とする土器もあり、間壁忠彦が酒津式として提示した土器（間壁忠彦1958）と百間川古墳時代Ⅰの古相を呈する土器との間に別型式として捉え直さなければならないほどの違いがあるのか否か、簡勁な説明が必要だろう。

1994年から1998年にかけて岡山市津寺遺跡の報告書が刊行され、弥生時代から古墳時代前期に至る多量の資料が公表された。報告書の編集担当者により時期区分に若干の違いがあるが、百間川遺跡と川入・上東遺跡の編年に対応する津寺遺跡の編年案が分かりやすく整理されている。『津寺遺跡』5の編集を担当した正岡睦夫は、津弥後Ⅳ（津寺遺跡弥生時代後期Ⅳ）を才の町Ⅰ・Ⅱ式に対応させ、酒津式土器を才の町Ⅰの一部と才の町Ⅱに併行するものとして弥生時代後期に位置づけている。また、古墳時代前期の土器型式としては、壺口縁部の櫛描文と壺・鉢口縁部の上方への拡張、壺胴部の球形化を特徴とする津古前Ⅰ（津寺遺跡古墳時代前期Ⅰ）に下田所式と共に続く亀川上層式の一部、壺口縁部の櫛描文の退化と完全な丸底化を特徴とする津古前Ⅱに亀川上層式の大半と共に続く川入大溝上層式の間を埋める未発見の型式、土器の胎土が粗くなり高坏の長脚化と内面削りを特徴とする津古前Ⅲは川入大溝上層式に併行するとしている。これら津古前Ⅰから津古前Ⅲにいたる変遷は百間川古墳時代ⅠからⅢに対応するものである（正岡睦夫1998）。

この様に中部瀬戸内地方の土器編年が整理され、酒津式の位置づけがある程度固定してきた背景には、百間川原尾島遺跡と津寺遺跡の調査により膨大な当該期の資料が蓄積されたことと、奈良県桜井市纏向遺跡の発掘調査報告書である『纏向』が1976年に刊行されたことにより、大和地方の土器編年骨子が明らかになったこと、百間川原尾島遺跡と津寺遺跡の発掘調査の進展により畿内・山陰・東海・四国といった各地の収入土器が発見され、これらの地域の土器と中部瀬戸内地方との土器の併行関係が明らかになったことが挙げられよう。

6 薬師前遺跡出土土器の位置づけ

中部瀬戸内地方の弥生時代後期から古墳時代初頭の土器研究の現状が幾分明らかになったところで、薬師前遺跡出土土器の位置づけを行おう。薬師前遺跡に固有とも思える特徴的な土器が多いなかで、他の遺跡と比較検討できる資料は第2号土壙出土の24と第14号土壙出土の39である。藤田が指摘した鼓形器台のくびれ部最小径を1とする器高との比率は、39が1.39、24が現存高で1.45、底径と口径と同じ大きさと推定して最も大きい器高を想定した場合が1.64、筆者の推定値が1.56である。中部瀬戸内地方と山陰地方に挟まれた美作地方の弥生時代後期から古墳時代前期の土器編年と両地方の併行関係を検証した藤田は、鼓形器台の変遷についてⅢ期が1.7~2.2と2.7~3.0、Ⅳ期が1.3~1.5、Ⅴ期が1.1~1.0の数値を示すとするから（藤田憲司1979）、39は典型的なⅣ期、24もⅣ期の範疇とできようが、やや古い様相を呈していることになる。藤田のⅣ期は才の町II式から下田所式、つまり百間川後期IV=津弥後IVから百間川古墳時代前I=津古前Iに併行することになる。

次に第15号土壙から出土した56の甕について検討してみよう。この甕は連続ラセン叩き手法を用い、叩き目は庄内型甕と異なり1粒あたり3~4粒の太いザックリした叩き目で右上りを呈している。一見すると畿内第V様式に属する土器のように思えるが、この土器はかつて上田町1式と呼ばれたことのある畿内第V様式の系譜的特徴を備えた土器で、庄内甕に併行して使用され、近年「V様式系甕」と研究者の間で呼ばれているものである（米田敏幸1994）。

V様式系甕の存在は豊中古池遺跡の調査に携わった酒井龍一らにより1976年頃には知られていたが、米田文孝は、豊中市利倉西遺跡、同市庄内遺跡出土の庄内河内型甕、桜井市纏向遺跡東田南溝上層出土庄内大和型甕に小さな平底をもつものがあることを指摘して、庄内甕の影響を受けたV様式系甕の存在を明らかにしている（米田文孝1982）。このなかで米田文孝は「祇津では庄内式期の弥生後期型甕は庄内型甕の影響を受けて尖底化するものが多いが、このなかには底部内面に絞り目状の痕跡が観察され、底部輪台技法による成形第一段階の輪台中空部を充填せずに直接叩いて尖り底にした可能性が推定できるものがある。」としており、薬師前遺跡出土の小さな平底をもつV様式系甕が米田文孝の指摘する技法を用いて製作された甕で、かつて上田町1式の指標とされた土器に酷似するものである。庄内甕の起源を東部瀬戸内（播磨）地方に求める米田敏幸（米田敏幸1992a、1992b）は上田町1式と呼ばれた小さな平底をもつV様式系甕を米田敏幸編年の庄内式期IIに比定し、当該期の遺跡である西岩田遺跡Aトレンチ溝1から中部瀬戸内地方の下田所式に比定される甕が出土している（米田敏幸1994）。西岩田遺跡Aトレンチ溝1出土土器は寺沢薰により岡川尚功編年の纏向2式後半に位置づけられており（岡川尚功1976、寺沢薰1985）、石野博信も上田町1式を纏向2式に併行する庄内1式に対応させている（石野博信1976）。

このような各氏の見解を整理すれば、上田町1式に併行する薬師前遺跡第15号土壙出土のV様式系甕は纏向2式後半に併行するものとできる。それでは次に岡山県下で発掘調査された遺跡から出土した土器でこの事実を検証してみよう。

7 検証

津寺遺跡中屋調査区堅穴住居-288からは下田所式併行の甕とともに米田敏幸編年の庄内式期IIに相当する庄内河内型甕とV様式系甕、青木V・IV期に相当する伯善・因幡系高杯が出土し、庄内河内型甕の胎土には角閃石が含まれていることから、河内地方からの搬入の可能性が指摘されている（正岡睦夫1998）。共伴した在地甕は平底を呈しており、津古前Iに相当するものである。この事実は西岩

田遺跡 A トレンチ溝 1 で検出された中部瀬戸内系壺が縦向 2 式後半併行の下田所式に相当するとの認識が正しかったことを津寺遺跡で再検証したことになる。しかし、ここで筆者が問題にしたいのは下田所式が仮に 3 段階に分けられるとすれば、西岩田遺跡 A トレンチ溝 1 で検出された中部瀬戸内系壺が下田所式の古・中・新相のどの段階に併行するのかということである。

下田所式に併行する百間川古墳時代 I が 3 段階に分けられることは、1980 年の段階で江見が指摘したことであり、畿内系の搬入土器を利用してこのことを検証できる資料に津寺遺跡中屋調査区竪穴住居-106 出土土器がある（亀山行雄 1996）。津古前 I の中でも古相を呈するとされるこの資料には、下田所式併行の在地壺と V 様式系壺、これに縦向 2 式前半に併行すると考えられる東海系の S 字状口縁台付壺が出土しており、下田所式が畿内の土器編年である縦向 2 式前半（庄内 1 式前半）にまで遡るものであることを物語っている。

それではこのような方法で亀川上層式の上限が求められるであろうか。亀川上層式は小若江北式（布留 2 式）に先行し、布留 1 式（縦向 4 式）に併行すると考えられている。そして、縦向 4 式に併行すると思われる土器が津寺遺跡中屋調査区竪穴住居-218 より出土している（正岡睦夫 1998）。この住居跡からは内行花文鏡の破片と共に出土した土器のなかに、縦向 4 式に併行し寺沢により茶臼山形二重口縁壺と命名された壺（寺沢薰 1985）に酷似する土器が出土しており、同住居跡から出土した土器は津古前 II に位置づけられている。これは津古前 I と II の接点（亀川上層式古相併行）が縦向 3 式に併行する時期のいすれかにあることを暗示するもので、幸いにもこの接点に当たる土器が津寺遺跡中屋調査区土壙-139 より出土している（亀山行雄 1996）。在地壺と伴出した縦向遺跡の壺 C の中でも c 種とされるこの壺は、縦向 3 式前半に僅かにみられるが主体は縦向 3 式後半にある壺とされている（関川尚功 1993）。報告者は小型丸底壺や鉢の精製品と共に伴しない在地壺と c 種の壺の伴出に戸惑いをみせ、一括性に問題ありとしながらも土壙出土土器を津古前 II に位置づけている。このような土器の伴出関係は縦向 III 式前半と縦向 III 式後半の辺りに下田所式と亀川上層式の接点があることを示唆している。

迂遠な方法で下田所式と縦向遺跡の関川編年との併行関係を述べたが、ここで筆者が明らかにしたかったのは薬師前遺跡第 15 号土壙に一括廃棄された土器が、下田所式に併行する土器のなかで中段階に位置づけられるもので、縦向 2 式後半に併行するものではないかということである。また、このことは薬師前遺跡第 14 号土壙出土鼓形器台が鍵尾式と小谷式の間のヒアタスを埋めるために、藤田により充當された平所遺跡第 1 号住居跡出土土器（藤田憲二 1979）、すなわち花谷めぐむにより新たに設定された大木権現山式（花谷めぐむ 1987）に併行することにもなる。

8 器種構成と特徴

薬師前遺跡出土土器の器種構成は、壺・甕・蓋・鉢・高壺・鼓形器台・壺である。これらの土器は中部瀬戸内地方の影響が弱く、基本的な器種構成は伯耆・因幡地方の該期の土器組成に酷似する。甕・壺は基本的に天神川流域の土器の影響を受けた二重口縁を呈し、これに播磨系の甕が加わり、蓋は大きさから伯耆・因幡系の甕に用いられたものと思われる。鉢には伯耆・因幡系のものと畿内系の大型片口鉢が存在する。高壺は単脚で脚柱内部が粘土により充填されたものがある。鼓形器台は完全な伯耆・因幡系土器であり、壺は中部瀬戸内・伯耆・因幡の双方で見受けられる。また、当該期に存在するはずの小型器台は受け入れを拒否するかのように組成から欠落する一方で、鼓形器台に代わる高壺に起源を求めるべきな器台（3・23・61）が出現している。中部瀬戸内系の頸部に沈線を施した長頸甕は津山市大田十二社遺跡や同市二宮遺跡では出土しているにもかかわらず、薬師前遺跡では細片

に至るまで一片の出土もないのは遺跡の存続期間のズレによるものだろう。薬師前遺跡を検討した結果にすぎないのだが、筆者は吉井川上流域・香々美川流域ではかなりの器種が伯耆・因幡地方でも東伯耆の天神川流域に起源を求めるのではないかと考えている。おそらくこの頃の美作地方では小さな水系単位で特徴ある土器を作り、使用していたのだろう。

9 まとめ

薬師前遺跡出土土器は掘立柱建物跡を含めた遺構の検討から、集落として二時期にわたる可能性があり、第2号土壙出土土器は第14号土壙出土土器より先行するものかもしれない。また、第14号土壙出土遺物と第15号土壙出土遺物が間違いなく同時期であるとする確証もない。しかし、今はこの事実を指摘するのみに留め、今回の発掘調査で得た資料をもとに下田所式の中段階、関川編年の纏向2式後半に併行する、弥生時代後期末の吉井川上流域・香々美川流域の土器型式を表徵する標準資料として、新たに「薬師前式土器」の存在を提唱したい。岡山県北部においてこの型式に併行する土器を出土しているのは、津山市二宮遺跡（高畠知功1978）・同市大田十二社遺跡（中山俊紀1981）・北房町谷尻遺跡（高畠知功1976）を想定しているが、これはひとつの考え方としての理解に留まっている。今後、吉井川上流域・香々美川流域の当該期の資料が増加すれば「薬師前式土器」の細分も可能になるかもしれない。

参考文献

- 石野 博信 1976 「纏向式土器の設定と畿内赤焼土器の展開」「纏向遺跡」桜井市教育委員会
- 入倉 徳裕 1996 「中国・四国地方の古墳時代の土器 酒津式土器」大川清・鈴木公雄・工楽善通編『日本土器事典』雄山閣
- 江見 正己 1980 「百間川原尾島遺跡」1 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告39 岡山県教育委員会
- 鎌木 義昌 1955 「各地域の弥生式土器中国」「日本考古学講座」4 河出書房
- 1958 「岡山県倉敷市酒津遺跡の土器」「弥生式土器集成資料編」東京堂
- 亀山 行雄 1996 「津寺遺跡」3 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告104 岡山県教育委員会
- 閑川 尚功 1976 「纏向遺跡の古式土器」「纏向遺跡」桜井市教育委員会
- 1993 「大和の布留土器と布留窯の出現について」「庄内式土器研究」Ⅳ 庄内式土器研究会
- 高畠 知功 1976 「谷尻遺跡」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(11) 岡山県教育委員会
- 1978 「二宮遺跡」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(28) 岡山県教育委員会
- 寺沢 薫 1986 「矢部遺跡」奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49冊 奈良県権原考古学研究所
- 中山 俊紀 1981 「大田十二社遺跡」津山市教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告第10集 津山市教育委員会
- 花谷めぐむ 1987 「山陰古式土器の型式学的研究」「鳥根考古学会誌」第4号 鳥根考古学会
- 間壁 忠彦 1958 「倉敷市酒津及び新屋敷出土の土器」「瀬戸内考古学」第2号
- 正岡 瞳夫 1998 「津寺遺跡」5 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告127 岡山県教育委員会
- 柳瀬 昭彦 1974 「山陽新幹線建設に伴う調査Ⅱ」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書第2集 岡山県教育委員会
- 1977 「川入・上東」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告16 岡山県教育委員会
- 米田 敏幸 1992 a 「畿内古式土器に関する二つの仮説」「庄内式土器研究」Ⅰ 庄内式土器研究会
- 1992 b 「庄内播磨型甕の提唱」「庄内式土器研究」Ⅲ 庄内式土器研究会
- 1994 「河内における庄内式土器の編年」「庄内式土器研究」Ⅶ 庄内式土器研究会
- 米田 文孝 1982 「弥生後期型甕から布留型甕へ」「ヒストリア」第97号 大阪歴史学会
- 藤田 慶司 1979 「山陰『鍵尾式』の再検討とその併行関係」「考古学雑誌」第64巻第4号 日本考古学会

写 真 図 版



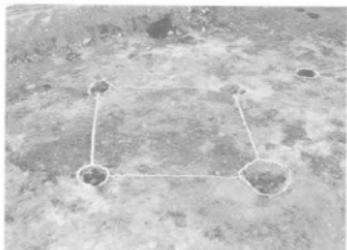
A区全景



第1号住居跡



第1号・第2号掘立柱建物跡



第3号掘立柱建物跡

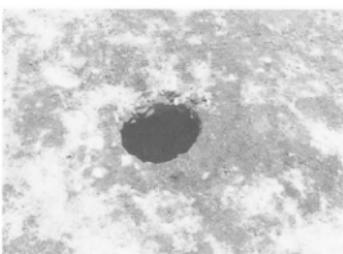


第1号土壙

図版2



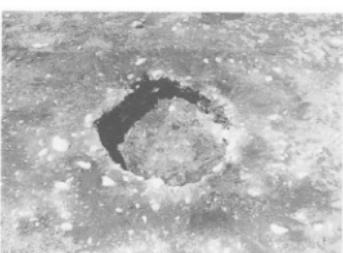
第2号土器出土状態



第5号土器



第14号土器出土状態



第15号土器



第15号土器出土状態



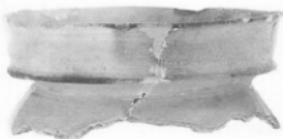
第15号土器出土状態



第1号溝



B区第1号トレンチ



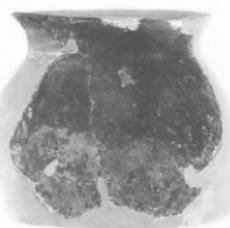
第1号土壤出土甕 第15图-2



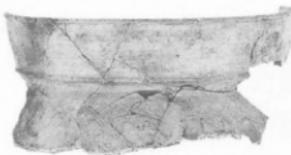
第1号土壤出土器台 第15图-3



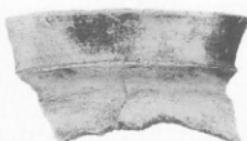
第1号土壤出土高环 第15图-4



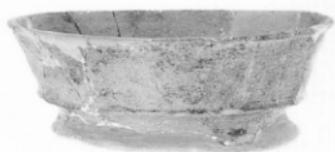
第2号土壤出土甕 第15图-8



第2号土壤出土甕 第15图-9



第2号土壤出土甕 第15图-10



第 2 号土壤出土甕 第15图-11



第 2 号土壤出土甕 第15图-13



第 2 号土壤出土高坏 第15图-17



第 2 号土壤出土坏 第15图-18



第 2 号土壤出土坏 第15图-20



第 2 号土壤出土盖 第15图-21



第2号土壤出土器蓋 第15圖-22



第2号土壤出土器台 第15圖-24



第14号土壤出土壺 第16圖-34



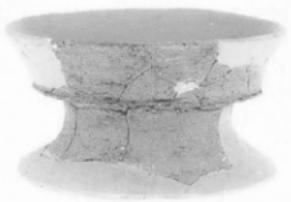
第14号土壤出土壺 第16圖-35



第14号土壤出土壺底部 第16圖-35



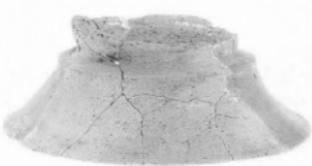
第14号土壤出土壺 第16圖-36



第14号土壤出土臺 第16圖-37



第14号土壤出土器台 第16圖-38



第14号土壤出土器台 第16圖-40



第15号土壤出土壺 第17圖-54



第15号土壤出土壺 第17圖-55



第15号土壤出土壺 第17圖-56



第15号土壤出土器底部 第17图-56



第15号土壤出土器底部 第17图-56



第15号土壤出土高坏 第17图-58



第15号土壤出土器台 第17图-61



第15号土壤出土坏 第17图-63



第15号土壤出土坏 第17图-64

報 告 書 抄 錄

| ふりがな | やくしまえ | | | | | |
|----------------|---|----------------------|--|--------------------|-------------------------------------|---|
| 書名 | 薬師前遺跡 | | | | | |
| 副書名 | 畜産基盤再編総合整備事業(美作地区鏡野団地造成)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 | | | | | |
| 卷次 | 1 | | | | | |
| シリーズ名 | 鏡野町埋蔵文化財発掘調査報告 | | | | | |
| シリーズ番号 | 第5集 | | | | | |
| 編著者名 | 立石盛詞 | | | | | |
| 編集機関 | 岡山県苦田郡鏡野町教育委員会 | | | | | |
| 所在地 | 〒708-0324 岡山県苦田郡鏡野町竹田660番地 Tel 0868-54-0573 Fax 0868-54-0656 | | | | | |
| 発行年月日 | 西暦1999年3月30日 | | | | | |
| ふりがな 所収遺跡 | ふりがな 所在地 | コード 市町村 | 北緯 °°' | 東経 °°' | 調査期間 | 調査面積 m ² |
| やくしまえ 薬師前遺跡 | 岡山県 苦田郡 かみののちょう 鏡野町 きょうのちょう 真加部 まかべ 1383番地 | 33606 | 35° 04' 45" | 133° 55' 09" | 1997 0416 1997 0707 | 2,662 |
| | | | | | | 畜産基盤再編 総合整備事業 (美作地区鏡 野団地造成) に伴う発掘調 査 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 | |
| 薬師前遺跡 | 集落 | 弥生時代 鎌倉時代 時期不明 | 竪穴式住居1 建物3 土壙5 溝1 溝1 土壙22 柱穴16 | 弥生土器 勝間田焼 | 庄内I式新相・ 下田所式中相併 行の薬師前式土 器。 | |

鏡野町埋蔵文化財発掘調査報告第5集

薬師前遺跡

畜産基盤再編総合整備事業（美作地区鏡野団地造成）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

1999年3月30日発行

発行 岡山県苦田郡鏡野町教育委員会
岡山県苦田郡鏡野町竹田660番地
印 刷 株式会社 めようせい

